

~~292~~
~~559~~

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/₇₀m 1 2 3 4 5

始



主婦之友會叢書第五篇

テニ入の上達法

東京駿河台 主婦之友社編輯及發行

特110

409



主婦之友婦人家庭叢書

第五篇

テ
ニスの上達法

發行所

東京市
駿河臺

主婦之友社

大正

15. 6. 5

内交

今日に於て最も國際的な遊戯の一つはテニスであります。また、男女の區別なくこれに參加することのできる競技としても、テニスほど一般的のものはありません。

この書は、全篇を軟球と硬球との二部門に分け、平明な言葉をもつて、上達法の實際を述べたものであります。小冊子ではありませんが、現在テニスを樂しむ方々にとつて、御参考となる點が少なくないと思ひます。尙ほ本書は庭球家にして、『主婦之友』記者である太田利雄氏が専ら編輯に從事したことを、申添へておきます。

『主婦之友家庭叢書』の編輯發行に就て

◇私どもが生きて行くためには多くの知識を必要とします。その知識を得るためには、どうしても書籍に就かねばなりません。ところが、これまでの書籍は一つの必要な知識を得るために、多くの不必要なことで読まねばなりません。それは忙しい生活の今日、多くの人には許されぬことであります。

◇生活上必要な知識を、確實に、そして手取り早く得る方法として、『主婦之友家庭叢書』の編輯發行を企てました。この叢書は婦人や家庭の生活に、缺くことのできぬ實際的知識を、雑誌『主婦之友』の編輯と同じやうに、確實、親切、簡單を旨として、提供することにとめました。

◇従來の書籍にも一つの缺點がありとすれば、それは定價の高いついふこととでありました。この叢書は、それらの方面にも幾分の改善を施し、一冊六十錢でわかつことにいたしました。この叢書は、とりあへず一冊を以て、第一期事業として完結したい豫定であります。この叢書の一冊でも御覽になつた方で、もし私共と御同感の方がございましたら、この叢書を一冊でも多く御覽のうへ、この叢書の目的の達成に御盡力のほどをお願ひ申します。

大正十五年四月十九日
主婦之友社編輯局にて
石川武美

テニスの上達法 目次

軟球

一、軟球と硬球 七

二、コートと用具 九

(1) 位置の選び方 九

(2) コートの作り方 一〇

(3) コートの保存法 一一

(4) コートの正しい劃線法 一二

(5) ネット、ポスト、ライン 一四

三、ラケットの持ち方 一五

四、正しいフォームを作れ 一八

五、打球による打ち方の名稱 一九

六、ボールを打つ姿勢 二〇

七、ドライブの打ち方 二三

八、バックの打ち方 二三

九、球を打つ高さや距離 二五

一〇、大切な眼と足の注意 二七

(1) 常に眼を球に注ぐ事 二七

(2) ボールの方向と足の關係 二八

一一、ヴォレーの打ち方 二九

(1) スマッシング 三〇

(2) 肩より上のヴォレー	三二
(3) 肩より下のヴォレー	三三
(4) 腰より下のヴォレー	三三
(5) ストップ・ヴォレー	三四
(6) ショート・バウンド	三四
一、二、ロップの擧げ方	三五
一三、サーヴィスとレシービング	三六
(1) サーヴィス	三六
(2) レシービング	三九
一四、ゲームとカウント	四一
(1) ゲームの方法	四一
(2) カウントの仕方	四二
一五、前衛と後衛	四三
(1) 前後衛の任務	四四

六、ストロークス	七一
(一) グラウンド・ストローク	七二
(二) フォアハンド・ストローク	七四
(三) バックハンド・ストローク	七六
(四) ドライヴ	七七
(五) チョップ・ストローク	七八
七、ヴォレーの打ち方	七九
(一) ヴォレーに就いて	七九
(二) 普通のヴォレー	八〇
(三) ロウ・ヴォレー	八一
(四) ストップ・ヴォレー	八一
(五) ハーフ・ヴォレー	八二
(六) スマッシング	八三

(2) 前後衛の位置と動き方	四五
(3) 前後衛の連絡	四七
▲軟球の規則	四九
硬球	
一、軟球から硬球へ	六一
二、ラケットの選び方	六三
三、ラケットの握り方	六四
四、上達する練習の順序	六七
五、球の廻轉とその處理法	六九
(一) スライスのボール	六九
(二) ドライヴのボール	七〇
(三) チョップのボール	七一

八、ロップ	八三
九、サーヴィス	八四
(一) サーヴィスの心得	八五
(二) サーヴィスの種類と打ち方	八六
(三) フット・フォールト	八八
一〇、ゲームの仕方とカウント	九〇
一一、シングル・ゲームの心得	九三
一二、ダブル・ゲームの要領	九五
一三、試合に就いての注意	九七
一四、理想的のテニス服装	九九
▲硬球の規則	一〇一
(附録) 庭球用語	一一〇

繪 口

- (1) デヴィス・カップ戦へ
- (2) 名選手のフォーム(その一)
- (3) 名選手のフォーム(その二)

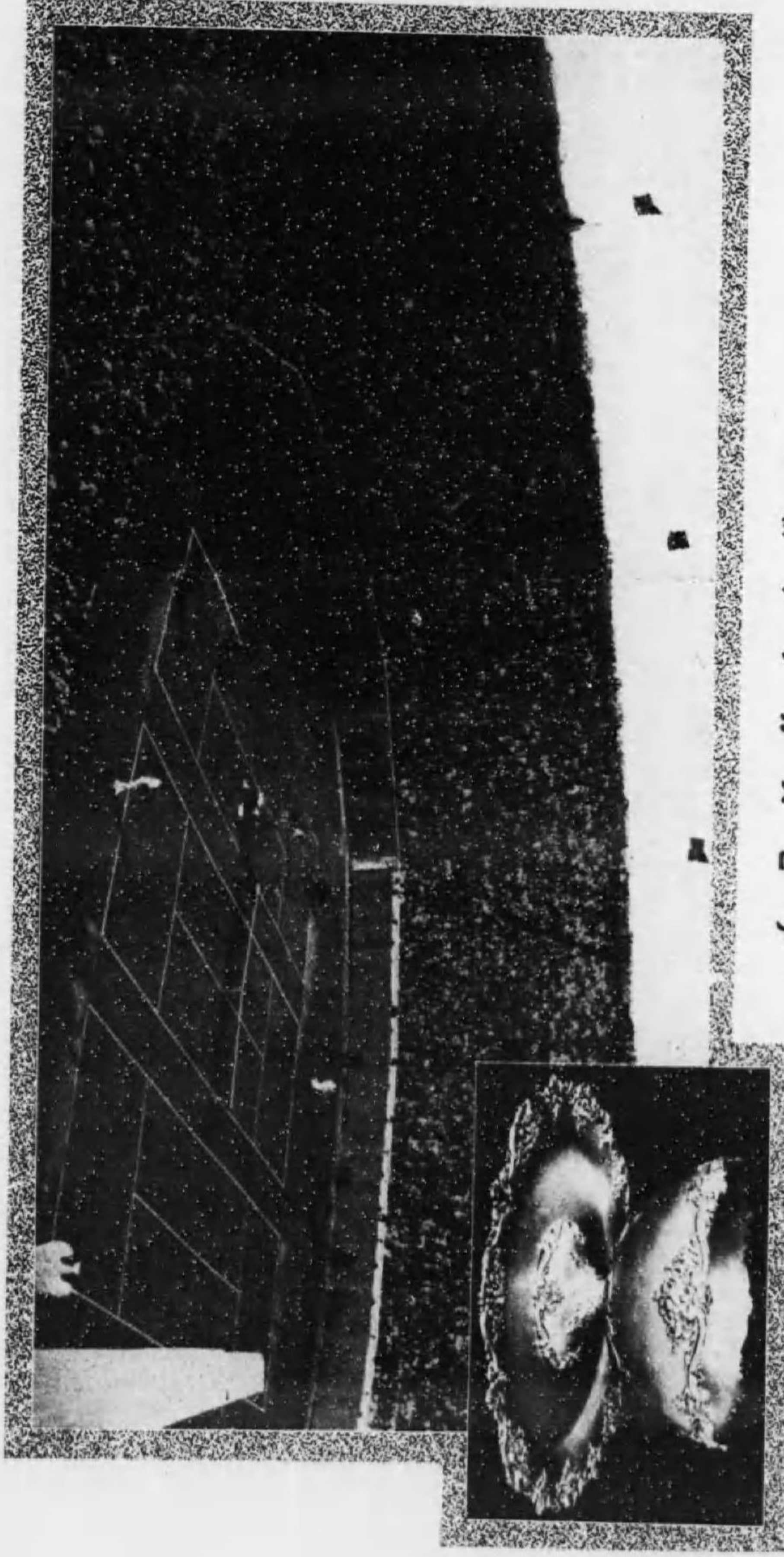
挿 圖

- 第一圖 コートの劃線法……………一三
- 第二圖 ラケットの持ち方……………一六
- 第三圖 フォアハンドの構へ方……………二二
- 第四圖 バックハンドの構へ方……………二四
- 第五圖 ロウ・ヴォレーの構へ方……………三三
- 第六圖 サーブの入れ方……………三七
- 第七圖 レシーブの返し方……………四〇
- 第八圖 前後衛の位置……………四四
- 第九圖 前衛の進み方……………四六

- 第十圖 ダブルのコート……………五〇
- 第十一圖 シングルのコート……………五九
- 第十二圖 ラケットのグリップ……………六六
- 第十三圖 ドライヴの球の進み方……………七〇
- 第十四圖 チョップの球の進み方……………七一
- 第十五圖 ドライヴの打ち方……………七六
- 第十六圖 チョップの打ち方……………七八
- 第十七圖 足の構へ方(スライス・サーブ)……………八五
- 第十八圖 足の構へ方(アメリカン・サーブ)……………八七
- 第十九圖 フット・フォールト……………八九
- 第二十圖 硬球のコート……………一〇三

— 目次 をはり —

「テニス」を握るもので「デビス・カップ」の名を知らぬものは恐らくないであらう。この「テニス」は米國の「デビス」氏が初め、英米の對抗、陸球に提供されたものなのですが、いまでは三十ヶ國餘が参加する國際陸球の賞杯となつてゐます。眞實は「デビス・カップ」とその決勝戦の行はれる四万人餘を容れる紐育市外「アムステルダム」の大戦技場であります。



テニス・コート

（一のそ）ムーオフの手選名

名選手のフォームを研究することは、テニス上達の秘訣であります。寫眞は世界的名選手の見事なフォームを示すもので（一）は世界庭球界の第一人者米のチルデン選手（右）とウァーナー選手の前進振り。（二）は米のデ・ンストン選手のフ、アーハンド・ストローク。（三）は米のリチャーズ選手のサーヴィング。（四）は佛のボロトラ選手のバックハンド・ヴ・レ。（五）は福田選手のロウ・ヴ・レ。



(二のそ) ムーオフの手選名



婦人のテニス振りはどうしても小さいやうです。しかし名選手のフォームは男子と變りません。寫眞(一)は日本女子庭球界の第一人者
黒井梯子嬢のサーヴィング。(二)は米國一のウ・ル・ス嬢のバックハンド・ヴォレー。(三)は米のマロリー夫人のバックハンド・ストローク。
(四)は田村富美子嬢のレシーヴィング。(五)は速い球をとらうとする世界女子庭球界の第一人者、佛のランラン嬢であります。

テニスの上達法

主婦之友社編輯局

軟球

一、軟球と硬球

テニスはその使用する球によつて、軟球と硬球に分けます。軟球はソフト・ボールと言ひ、普通のゴム球、硬球はハード・ボールまたはレギュレーション・ボールと言ひ、スポンジ・ボールのやうな厚いゴム球の上に、薄い滑らかな白羅紗を被せたものであります。世界各国のテニスはみなこの硬球であります。我國では硬球をやる人は未だ少く、多くは軟球をやつてをります。かく世界各国のテニスに硬球でありますのに、我國のみ何故に軟球を使用してゐるかと思はれますと、テニスが明治十一年頃に、本場の英國から輸入せられました。

た當初に於ては、勿論硬球を使用したのでありますが、當時その硬球を外國から輸入する便宜が少く、よし手に入るとしましても非常に高價であり、また内地ではその硬球を製造ができませんでしたので、これに代るべきゴム球が製造されるに至つた次第であり、従つて硬球のテニスとは、また異つた軟球のテニスが新にできた譯であります。ですから軟球は他國には無い我國獨特のものであり、その打ち方からゲームの方法等までも、全部我國だけのものであります。

硬球は國際的の競技として、今や世界中到る所に行はれ、そのゲームの方法規則なども、全世界を通じたものでありますし、軟球はまたその獨特の發達をなして、我國到る所に普及し、男子女子によつてプレイせられてゐるのであります。

かやうな譯で、硬球と軟球とは、そのボールから、打ち方、ゲーム、規則などが全然異つてゐるものがありますので、これを説明いたしますにも、軟球と硬球とを分けて説明することが便宜であります。しかし硬球から出た軟球でありますから、その基本的の事項はどうしても硬球のテニスを主とせねばなりません。従つて硬球の打ち方に大切なことは、軟球にもまた大切なのであります。ですからそのいづれをプレイするにしても、次に述べる軟球硬球のテニスに就て、二つとも一應は御覽くださることを望むのであります。以下軟球と硬球のテニス上達法に就て、順次に記してゆくことにいたします。

二、コートと用具

(1) 位置の選り方

テニスをする場所をコートと言ひ、長方形の固い平坦な地面を、白線を以て規定の如く區劃したものであります。コートはボールのバウンド即ち撥みがい、やうに、なるべく地面が平坦で、かつ固くなければならず、また風向や光線の支配を受けることが非常に多いのでありますから、その位置の選擇もコートを作る上に於て大切なことであります。風を防ぐ方から言へば高い建物や森の影を選ぶべきで、また光線の工合からいへば、コートを東西に長く作りますと、午前にしる午後にしる、テニスをやり出すときは、多く光線に向つてせねばなりませんので、眩しくてやりにくいのであります。ですからこの眩しいのを防ぐために、コートはなるべく南北に長く作る方がよいのであります。なほ完全を期するならば、水ばけをよくするために、雨水などが速かに流れ去るやうな點にも注意すべきであります。

(2) コートの作り方

コートの位置を選定しましたら、こんどはコートの作り方がありますが、コートの種類にも、その構造上からいつているくありまして、赤土のコート、コンクリートコート、アスファルトコート、ローンコートなどがありますが、これ等のうちで赤土のコートが一番いゝやうに思はれます。前にも述べました通りに、コートはボールのバウンドが正確であればよいのですから、雑草や石コロをとり、地面が平坦で固くなつてをりさへすればよい譯なので、たゞ地面を平にしたばかりでも使用できませんが、それでは長持ちがしないのであります。土地を四五寸掘り返してコークスの細かに篩つたものを撒き、ローラーで平坦にしたコークスコートは、よく固まりさへすれば簡単に出来る立派なコートですが、手入れを充分にしなければ、よく風などのためにコークスが直きに飛ばされて凹凸を生ずることになり、またボールがコークスのためにすぐ黒くなる缺點があります。アスファルト、コンクリート等のコートは、水ばけもよくすることができ、霜解けなどのする氣遣ひもなく、冬期も使へますが、アスファルトコートは高價であり、コンクリートは夏期の反射光線が強いので眼の疲労を甚だしくし、かつ兩コートとも身體に對する當りが強いので、健康の點から申しましてあまり感心いたしません。またローンコートは、國際競技に使用される規定のコートであ

り、申分のないコートではありませんが、我國では芝がなかくに植ゑつかず、手入れにもかゝり、高價なので、一般的のコートとは申されません。するといまのところ一番よい赤土コートの作り方を申しますと、まづ地下一尺くらゐを掘り下げて、割栗石、中砂利、細かな砂利を敷き詰め、その上に赤土と粘土の混じつたものを約一二寸の厚さに敷き、苦鹽汁と水と半々くらゐに混じつたものを撒いて引き締め、更にローラーで固めたものであります。また割栗石や中砂利等を敷き込む代りに、煉瓦や、石炭殻などで撞き固めるものもありますが、要するに土臺を固くすると水引きをよくするためでありますから大した相違はありません。コートの幅や長さは規則の示す通りであります。なほ後方に於て三間、左右兩側に於て二間くらゐづつ空地があります。運動に差支へる場合が起ります。殊に硬球の場合に於きましては、なほ更餘分の空地を必要とするのであります。

(3) コートの保存法

コートは常にその手入れを怠つてはなりません。過度に乾燥せしめないやうに時々水を撒くこと、一月に一回くらゐづつ苦鹽汁一水二くらゐの割合に溶かしてコート一面に撒き、ローラーを曳いておけば、始終適度の濕氣を帯びさせておくことができ、従つて破損の度を少からしめることができます。コートを

いつもよくしておくためには、テニスをする前か後に必ずローラーを曳かねばなりません。殊に雨の後に忘れずにローラーを曳くことは、コートを引き締めて、ローラーもよく効くのであります。また夏季は毎日くらの水を撒き、冬季は蕪等でコートを掩つて霜解けを防ぐやうにせねばなりません。そしていゝコートの面は、いつも狐色をしてゐるものであります。

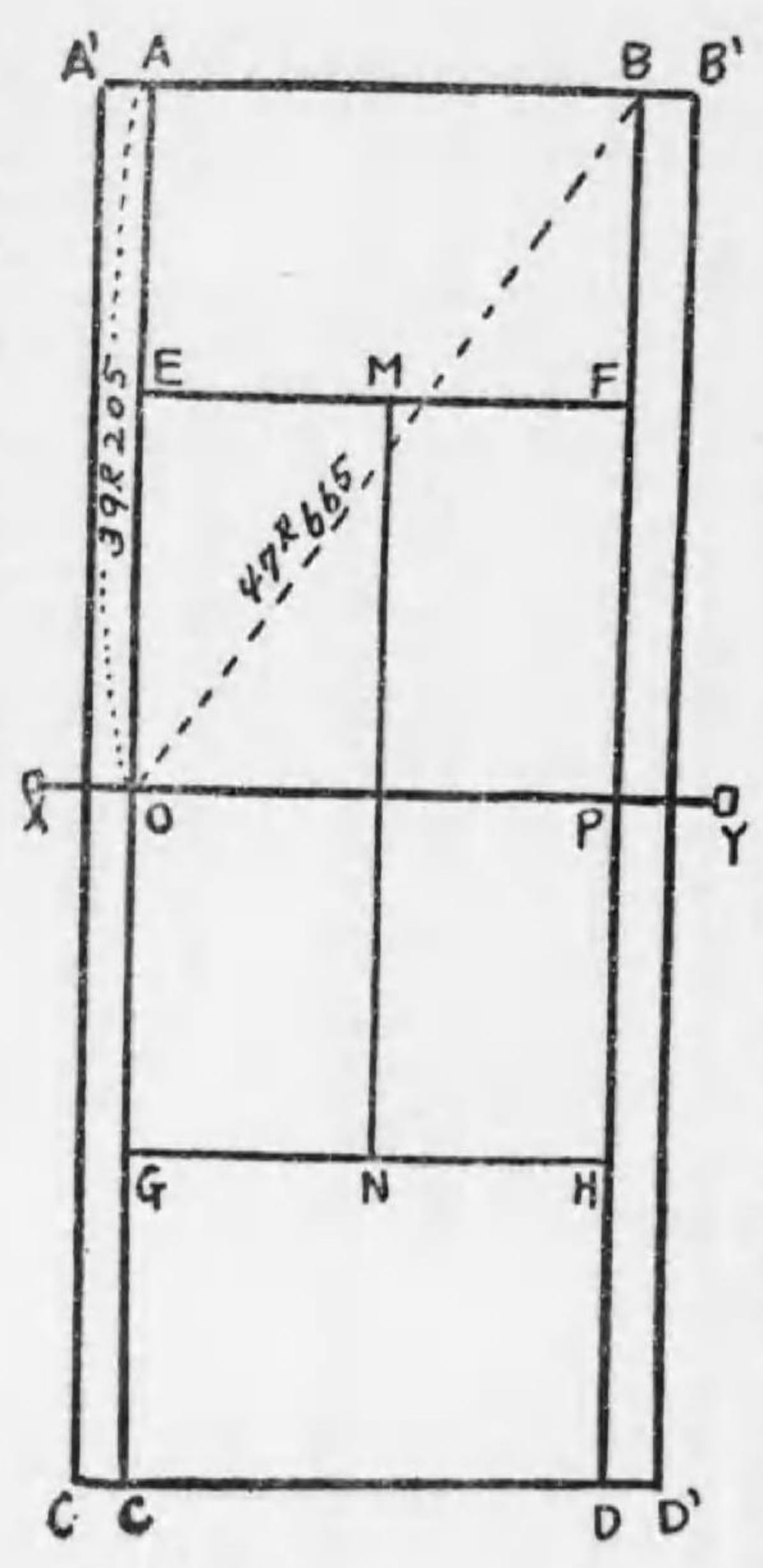
(4) コートの正しい劃線法

コートができ上れば、正確に規則通りのラインを引かねばなりません。その正確なコートの劃線法を左に述べることにいたします。

ダブルコートはシングルコートの總てのラインを包含してをりますので、便宜上まづシングルラインを見出し、そして所要のラインを延長して、ダブルコートのラインを引く方法を述べることゝいたします。

シングルコート 改正規則には米突法を採用してありますが、こゝには便宜上米突を尺に直して表示することにいたしました。

一、まづネットの位置XYを定めて、其所へ目標に三寸釘を立て、XYの中央にシングルコートの幅廿七尺一寸四分OPを見出して釘を立てます。



法線劃のト一コ……圖一第

二、Oより四十七尺六寸六分五厘の長さを以てB及びDの方向に、及び三十九尺二寸五厘の長さを以てA及びCの方向に各弧を描き、またPより四十七尺六寸六分五厘の長さを以てA及びCの方向に、及び三十九尺二寸五厘の長さを以てB及びDの方向に各弧を描き、描き各弧の交叉點ABC Dに釘を立てます。

三、OよりOA上及びOC上二十一尺一寸一分の點にE及びGを決定し、またPよりPB及びPD上二十一尺一寸一分の點にF及びHを決定し、各點に釘を以て目標を立て、おき、これ等の諸點を圖の如く結びつけければ、シングルコートABCDが出来ます。

四、EF及びGHの中央MNを見出し、これ等の諸點を圖の如く結びつけければ、シングルコートABCDが出来ます。

ダブルコート 圖示したシングルのコートに於て、A B線及びC D線を、兩方に四尺五寸二分五厘づつ延長してA' B' C' D'の四點を決定し、A A'、B B'、C C'、D D'及びA' C'、B' D'の諸點を圖のやうに結び付けるときは、ダブルコートA' B' C' D'を作ることができます。
なほ以上述べましたコートの各項に就きましては、硬球のコートにも適用することができますのでありますから、別に硬球のところでは述べぬことにいたします。

(5) ネット、ポスト、ライン

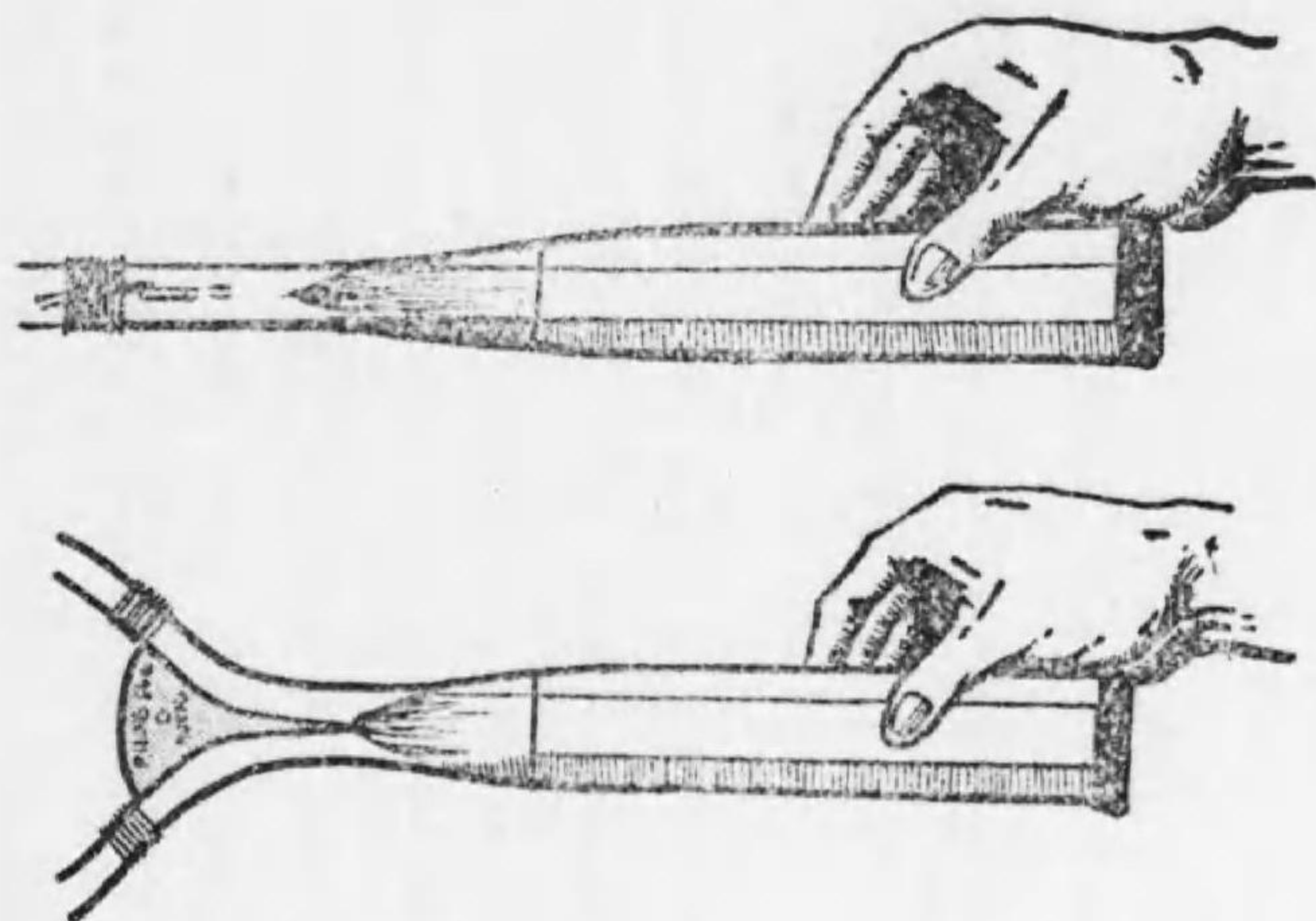
コートの附屬物としては網を張らなければなりません。ネットは運動具店より購入するほかありませんが、なるべく長いもので柱と柱の間が空かないものであり、かつよく張つてコート面との間が空かないやうな廣いものを選びねばなりません。どうかすると短い狭いものがあります。これはテニスをやりまじきいろ／＼な不便が起きてきますから、規定以上の充分の長さ及び幅を有するものであることを購入の際に注意すべきであります。ネットを張る柱即ちポストは、携帶用のものや固定のものなど、いろ／＼ありますけれども、多くは三四寸角のその基礎に十字型の臺をした柱を地下三四尺も埋め、ネットの一端をそれに結び付け、他の柱には齒車をつけて、それによつて完全に水平に張るやうにできてをります。ネットの高さは従

來は三尺三寸五分でありましたが、改正規則では硬球のネットの高さと同じく三尺五寸となりましたから、ポストもその高さを保つやうに立てねばなりません。

ラインは綱やテープを張つたり、木材を埋めたり石灰粉を撒いたりしたのですが、普通のコートでしたら、石灰を水に溶かして小箒でラインを引くのが一番完全なものであります。このライン引きもいろ／＼な器械ができてをりますが、割合に高價なので一般的ではありません。一番よい方法は、各區劃線の外側に麻糸をびんと張り、それを頼つて小箒に石灰の溶き水をつけながらラインを引いて行く方法であります。ラインの幅は六・六〇センチメートル約二寸を標準とすと規定せられてをりますので、多少太くとも細くとも差支へはありませんが、そのラインをコートの外側から更に太くして、コートの寸法を廣くするやうなことがあつてはなりません。

この他のテニス用具としては、ボール、ラケット、服装等がありますけれども、それ等に就きましては、規則中の『ボール』、『ラケットの選び方』、『理想的のテニス服装』等を御参照願ひます。

三、ラケットの持ち方



方ち持のトッケラ……圖二第
(す示を方ち持の持縦は圖下持横は圖上)

ボールの打ち方を研究する前に、まづラケットの持ち方を知らねばなりません。ラケットの持ち方は普通横持と縦持の二つに區別されます。横持は、ラケットを地面において、手の甲を眞上にしてその儘上からラケットを握るのです。その握つた手を自然に伸すと、地面とラケット面とは平行します。縦持は、ラケットを縦にしておいてその儘上から握るもので、その手を自然に伸すと、ラケット面と地面とは直角になります。大體この二つであります。この握り方即ちグリップの相違によつて、横持の方は、フォア、バックともラケットの片面ばかりでボールを打つことになり、縦持の方はラケットの両面でボールを打つことになります。この二つの持ち方のうち、いづれが優つ

てあるかと申しますと、長い間の研究の結果として、軟球には横持が一番よいことになつてをります。これは、軟球ではボールに廻轉を興へるドライブの打ち方が大切ですから、このドライブの打ち方に適する横持がよい譯なのであります。硬球ですと、この二つの持ち方に就て、なほ研究せねばなりませんけれども、軟球を始める初心者には、この横持を安全な持ち方とする次第であります。しかしこの持ち方でなければならぬといふ譯ではなく、各人がおのゝ個性を尊重し、これを發揮するやうに、その人の手の工合、筋肉の加減で、幾分づつは變つて行つても差支へないのであります。

またラケットの柄のどの邊を握るべきかも大切なことではありますが、これはなるべくラケットの端を握る方がよいやうです。これは手頭の運動を自由にして、強球のドライブをも送ることが出来ます。ラケットの柄の中程を握りますことは、一寸考へますと、如何にも自由にラケットが握れて強球が打てるやうに思はれますが、實際は球に速力を出さしめる手頭の運動の自由が、妨げられますので、強球を出すこともできず、かつ相手から強球を送られた場合に、これを受け返すことが困難であります。しかし前衛などがネット際に前進して球をとる場合には、そのボールの如何によつてラケットの中程を握つて打つことも必要なのであります。要するにラケットの中程を握ることは、打球の正確さはありませんが、強球を送ることができませぬから、深い強球を送ることのできる、ラケットの柄の端、なるべくは革を掌の中に入れてしまふやうに握つて、

そして正確に打てるやうに練習すべきであります。

四、正しいフォームを作れ

ラケットの持ち方ができましたら、いよくボールの打ち方に入るのでありますが、こゝで一言したいことは、『正しいフォームの持主であれ!!』といふことであります。見事なボール、スピードのあるボールを打つには、どうしても合理的な、力と術とを充分に奮ふことのできる打ち方でなければなりません。誰が見ても、見にくいフォームは、どこかに無理があるので、自分が奮はうといふ力を充分に發揮することができないのであります。またその力を充分に出さうとすれば、こんどは身體に無理をせなければならぬことになり、見にくいフォームとなるのであります。悪いフォームでも、ボールが打てないといふことはありませんが、悪いフォームでやつてゐますと、上達することが遅く、それが自分のフォームとなつてしまへば、決して上手にはなれぬのであります。

見事なボールを打つ名選手は、フォアーにしろ、バックにしろ、或はヴォレーにしろ、それごとく立派なフォームを持つてゐるものです。ですからそれ等名選手のテニス振りを見て、いゝなと思つたそのフォームを注視して、これを自分のものにするやうに練習することは、テニスに上達する一つの簡便な方法であります。また名選手のフォームの寫眞によつて研究することも、大いに得るところがあるのであります。立派なフォームといふよりは、まづ正しいフォームをつくるやうに心懸けることが大切であります。

五、打球による打ち方の名稱

ボールの打ち方によつて、いろいろ名稱が附けられてをります。まづこれを二つに大別して、一つをグラウンド・ストロークと稱し、他をヴォレーと稱します。グラウンド・ストロークとは、ボールが一度地面に落下し、そのバウンドしたのを打つ打ち方であり、ヴォレーとは、ボールがまだ地面に落下しないうちに、即ちボールの飛來中を打つ打ち方であります。

グラウンド・ストロークはボールをとる身體の位置によつて、更にフォアー・ハンド・ストロークと、バック・ハンド・ストロークに分けます。フォアー・ハンド・ストロークは、ボールを自分の右側にとつて打つ打ち方をいひ、單にフォアーともいひます。バック・ハンド・ストロークは、ボールを自分の左側にとつて打つ打ち方で、單にバックともいつてをります。勿論左利きの人は、この反對であります。

その他ボールに與へる廻轉や、ボールの飛ぶ性質によつてドライブ、カット、チョップ、ロップ等に細別されます。ドライブとはボールの後面から上面に向つてラケットを當て、ボールに右廻轉を與へる打ち方であり、カットは、ボールの後面(或は側面)から下面にラケットを當て、ボールに左廻轉を與へる打ち方であり、ロップは、たゞ單にラケットでボールを相手のコートに向つて高く打つ打ち方で、主として防禦として用ひられる打法であります。

またヴォレー中には、試合の第一球であるサーブ、スマッシュ、ヴォレー及びストップ、ヴォレー等があります。またヴォレーではなくグラウンド・ストロークの一種にハーフ・ヴォレーがあります。このハーフ・ヴォレーは俗にシヨート・バウンドといひ、ボールがコート上にバウンドすると同時に打つ打ち方であります。

六、ボールを打つ姿勢

ボールを打たうとするときは、決して身體の正面でボールをとることを避けて、必ずフォアかバックかにして、打てるやうに位置せねばなりません。さうしませぬと、ラケットに充分力を入れてボールを打つことができないのであります。

フォアの打ち方は、ボールが飛んで來たら直ちに、フォア・ハンドで打てるやうに身體を位置します。このとき必ず左肩はネットの方に向いてをらねばなりません。例へばネットと直角をなすやうに飛んで來たボ



第三圖……フ・ア・ハ・の構方

ールを打つときには、左肩はネットと直角をなすやうに位置するのです。そして後で述べるやうな足の注意をして思ひきり兩足を開き、横持に持った右手を充分に後方に引いて、ボールが自分の少し斜前方、適度にバウンドしたところを凝視めて、自分の打たうといふ方向に、強くボールを打つのです。このボールを打たうとして身體へたときは、身體の重心は右足にかゝつてゐますが、打つ瞬間は身體全體の重みを、總てボールに移して打つやうにし、打つた後の身體の重心は、左足の爪先に移り、身體の上半身は、軽く前方に押され氣味に進みます。

ボールを打ちますときに、右腕を身體につけて打つ人がありますが、この打ち方では、ラケットの振り方を制限し、かつ身體の重みを打球の際ボールに加へる謂ゆる力の入つたボールを打つことができませんから、

ラケットを握つた方の腕は、身體につけることなく、自由にラケットを振れるやうにせねばなりません。また左の手は、身構へすると同時に身體の平均をとるやうにし、打球後は軽く後方に振るのです。なほ後で述べます「球を打つ高さ」と距離」や、「大切な眼と足の注意」等を特に御参照ください。

七、ドライブの打ち方

軟球に於きましては、ドライブの打ち方が基礎であり、生命であります。従つてドライブの打ち方を知らねば、軟球を打つとは申されません。このドライブの打ち方は、まづラケット面をボールの後面から上面に擦り上げるやうにし、ボールに右廻轉を與へるものであります。ですから横持に持った手を後方に引いたときは、ラケット面と地面とは對し、掌は下向になります。ボールを打つ瞬間には、掌は斜前方に向きますが、ラケットがボールの中つて、ボールに廻轉を與へるために、ボールの後面から上面に擦り上げて打ちますので、掌は弧を描いて下向きます。そして振られた後のラケットは左肩前方に來り、ラケット面は前方を向いて地面と對します。また高いボールをドライブで打つた場合には、振られたラケット面は地面と平行するやうになります。

ドライブの打ち方によつて打たれた球、即ちドライブのボールは、與へられた極度の廻轉力によつて、ボールの速度は減ぜられますが、その與へられたボールの廻轉力が無くなると、急激に落下するのであります。その性質があるために、ドライブされたボールは、コート外にアウトするやうに思はれるものでも、よくコート内に落ちるのであります。しかしボールが濡れてある場合には、右の廻轉を與へることができませんので、變なカーブとなつて飛ぶのであります。

またこのドライブと反對に、球に廻轉を與へないやうに打つ、即ちボールの後面を打つのみで、上方に擦り上げないスライスの打ち方もあります。が、この打ち方によれば、ボールが飛んで行く際に、廻轉が少いので、ボールには速度が付きませんが、ドライブのボールよりはアウトする率が多い譯であります。しかし速球で相手の虚を抜くときとか、或はネット際に前進して高いバウンドの球を打ち込むときなどには、必要な打法であります。また硬球に於きましては、このスライスの打ち方は重要な打ち方であります。

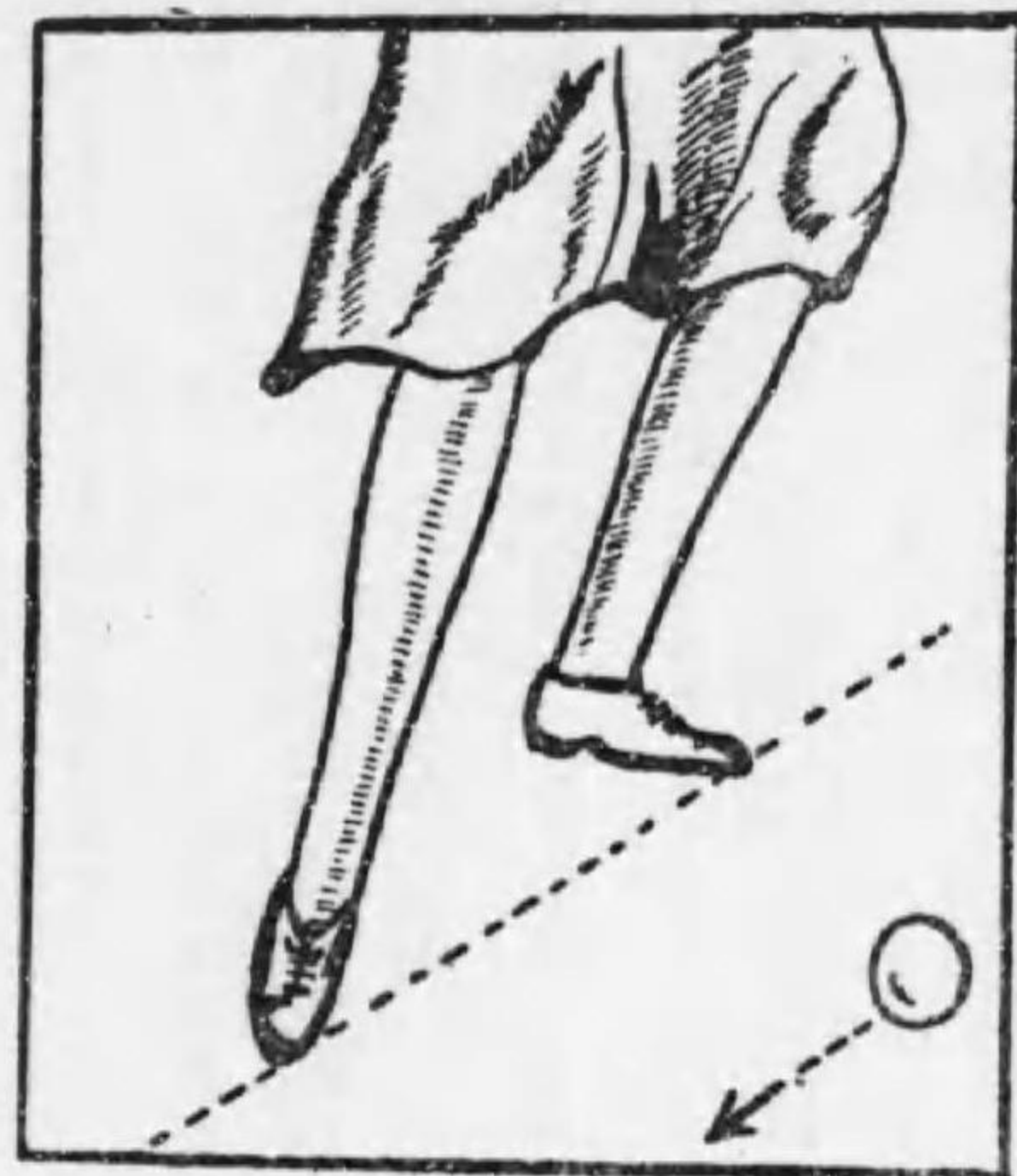
八、バックの打ち方

バックの打ち方は、むづかしいものとされてをります。しかし打ち方の要領を得てしまへば、フォーより

も正確に打てるやうになります。フォアーは、身體の構へも大きく、腕を自由に振ることができず、自由なだけに、やゝもすればいゝ加減の打ち方になり、不正確となるのでありますが、バックはラケットを持つてゐる方の手が身體の前方に来、かつ身體の構へ方が大きくなく、手を自由に振ることを幾分制限せられま

すので、その要領を得てさへしまへば、いつも機械的に、正確に打てるのであります。

ラケットの持ち方は、やはり横持で、握り換へないでよいのです。或はまたフォアーの持ち方を、少し右の方にずらしてもよいのです。そしてボールを打たうとして身構へしたときは、ラケットは右肩上に、かっただやうになり、ラケット面は地面と垂直になつてゐます。(このときラケットを握つた右手は、右肺上にあります。



方へ構のドンハ・クッパ……圖四第

そしてボールを正面よりやゝ右方にとり、構へたラケットをそのまゝに押し、ボールの後側面を強く打つのです。このときのラケットは、少しの弧を描くやうにし、振られた後のラケット面は、前方上方へ向きます

が、高い球のときはラケット面は地面と對します。またバックには、スライスの打ち方もよいのであります。この打ち方は、左肩に置いた右手を、そのまゝ地面と水平に大きな弧を描く氣味で、ラケットを水平に振つてボールの後側面を打つのであります。ですから振られた後のラケット面は、地面と垂直になるか、僅かに地面と對するのであります。高いバウンドのボールは造作もありませんが、低いボールをこの打ち方で打つには、身體をボールの高さまで低めて、そして幾分ボールにドライブをかける氣味にするのであります。バックのときのボールは、必ず前方にとるやうにします。後方にボールをとりますと、充分に強く打つことができないものであります。また多くの方が身體の近くにボールをとるやうですが、これも注意して、手を伸してラケットの中央で打つことのできる場所をとるやうにします。足の開きはフォアーのときよりも幾分狭くし、一尺から一尺五寸くらゐがよいと思ひます。

九、球を打つ高さとは距離

バウンドしたボールをどの邊で打つかといふことゝ、身體からどの邊の距離にボールをとるかといふことは、ボールを打つに際して最も大切なことでもあります。

打たれたボールの性質により、或はボールの落下場所によつて異なりますので、一概にどの邊を打つのが一番よいといふことはできませんが、普通の球を、ネットから離れて打つときには、ボールがバウンドして、その頂上から四分から六分くらゐまで下つたところを打つのが、一番いいやうに思はれます。この打ち方は最も普通に打たれる打ち方で、そして一番自然な打ち方でもあります。この邊にボールをとりますと、ドライブで打つに適し、狙ひが正確でもあり、強球を打つこともできるのであります。その他バウンドの頂上か、または少し落下したところを打つ打ち方と、地上僅かのところで打つ打ち方もあります。前者は上から打つのでアウトになる恐れが少いので、ネット際で打ち込むときか、或は相手に猶豫を與へぬために急いで打つときなどに用ひられます。また一番低いところで打つのは、相手の行動を少しでも長く見守つて、その際に打つやうにするとか、またはボールが遠いところに來たために、走つて行つてやうく打つ場合などの、特殊のときに打つべきもので、初心者が始めからいつもかゝるところでボールを打つことは避くべきであります。バウンドの頂上から四分か六分くらゐ下つたところを打つやうにすべきであります。

ボールと身體との距離に就ても、一概に申されませぬが、要するに手を伸してラケットの中央に中るやうにボールをとらねばなりません。このラケットの中央でボールを打つといふことは、ボールに力を與へる大切なことでもあります。また前でとるか、後でとるかも大切なことで、餘り後方でボールをとりますと、自分

の力を充分ボールに與へることができません、身體の方がボールのために押され氣味になりますから、幾分前の方即ち斜前方にとるやうにします。初心者は、多くはボールを身體の近くにとりますので、充分に手を伸してボールを打つことができず、従つて力が入らないのであります。また動きながら打球するのは、力を空費するものですから、一旦止つてからボールを打つべきであります。

一〇、大切な眼と足の注意

(1) 常に眼を球に注ぐ事

常に眼を球から離さないといふことは、初心者にとつて非常に大切なことでもあります。何故かと申しますと、初心者はなかくラケットの中央でボールを打つことができず、従つてかなり力を入れて打ちながらも、強い球とはならないのであります。常にボールに眼を注いで、ボールのバウンドから、打球のそのときまで、よくボールを注視すれば、バウンドの工合、ボールの打つところまでよく解り、正確にラケットの中央でボールが打てるやうになるのであります。ラケットの中央でボールを打てば、如何なる強球でも樂に打返

し得るものであります。ところが、いつも眼をボールに注いでゐれば、相手の動作をよく観察することができず、従つて攻撃力が鈍るといふこともあります。たゞ普通に打ち方ができるやうになつても、常にラケットの中央で強く打てるやうになるまでは、いつもボールに注目すべきであると思ひます。いま完全なプレーヤーになるまでには、十年餘りかゝるとすれば、少くとも初めの二年間は、忘れることなしにボールに眼を注ぐやうに努力すべきだと思ひます。

(2) ボールの方向と足の関係

ボールを打つに際して、足の動かし方、足の開き方は極めて重要であります。この足の動作如何によつては、フォームが亂れ、従つて思ふやうなボールが打てなくなり得ます。

テニスマンの足はダンサーの足の如く、いつも爪先で立ち、小刻みに、輕快に動かなければなりません。その足の構へ方には次の如き注意が肝要であります。即ち自分の打たうとするボールの方向と、兩足の爪先を結ぶ延長線とが、なるたけ平行に近いやうに兩足を開くのです。例へばネットと直角に來たボールを、またネットと直角に打ち返すときには、身體はネットに對して横向きに立ち、左右の足を二尺くらゐ開き、その兩爪先を結ぶ延長線とネットとが直角をなすやうな足の構へをします。また斜に打つ場合には、兩足の爪先

を結ぶ延長線とネットとのなす角度は、斜であればあるほど、鋭角をなしてくる筈です。フォーアーでも、バックでもこの如くにいたします。この足の構へは、フォーロー・スルー即ち重心の移動に關係するもので、右の如き足の構へでなければ、決して完全なる重心の移動は行はれないのです。ボールを打たうとするときは、右の如く足に重心がかゝり、打つ瞬間は、右足から左足に重心が移るその瞬間で、そのときに全身の重みをボールに加へるべきです。そして打つた後は、重心は完全に左足に移つて、ラケットは自然と前方に振られてゆきまです。ところがネットに正面に向つて、それで眞直なボールを打つても、重心は完全に移動せず、従つて力が入りませんので、そのボールには威力がない筈です。よし無理に手頭や腕で打つてボールに速度をつけてゐても、早く疲労を感じ、決して長續きはしません。名選手の打つ球が、たゞ當てるだけのやうで、しかも恐ろしいスピードのあるのは、この重心の移動が完全に行はれてゐるからであります。テニスはたゞ腕や手頭だけではなく、身體全體で打つやうにしなくてはなりません。このことは軟球でもさうであります。硬球には特にこの注意が肝心なのであります。

一、ヴォレーの打ち方

ヴォレーとは、相手の打つたボールを地面に落さない前に打つ打法でありますから、そのヴォレーする位置は、勢ひネット際であり、従つて前衛に立つ人は、殆どこの打法によつて打つといつてもよいから大切な打法であります。このヴォレーは、相手に餘裕を與へないこと、ネット際にあつてなすので、ボールを急角度に相手方のコートに送ることができまゝので、ヴォレーそのもの、職分は、全然攻撃的のものであります。ですからこのヴォレーをなさるときは、この特色を現すために決定的にヴォレーすべきであります。そしてこのヴォレーをなす際に、必ず注意せなければならぬことは、ヴォレーをなす瞬間には、決して後方に動かないといふことであります。なぜかといへば、ラケットが球に中つたときに、身體の重みを後方に引くと、力が減じられて、決定的のヴォレーはできないからであります。ヴォレーを更に分けて、スマッシング、肩より上のヴォレー、肩より下のヴォレー、ストップ・ヴォレーといたします。

(1) スマッシング

スマッシングは、強く打ち下すことを條件としますので、軽く受け返すだけでは眞のスマッシングではありません。このスマッシングの打ち方を言へばラケットの持ち方はグラウンド・ストロークのときと同様で、身體をや、反り身にし、ボールが身體の前方一尺くらゐのところ、丁度打ちよい高さまでボールが落下して

くるのを待つて、強く打ち下すのです。この打ちよい高さとは、腕を伸してラケットの中央で打つことができるところであります。餘り高いところではボールをとれば、力を充分に入れてボールを打つことができず、また頭上近くでも、また餘り後方にとつても、フォームが亂れて力が入りません。このスマッシングに於けるボールをとる高さは、一番むづかしく、そして一番大切なことなのでありますから、よくボールを注視してこれを研究すべきであります。

またスマッシングをどこに打ち込むべきかも大切なことです。名選手等がよくコートの斜にスマッシングして見事な得點をしますので、初心者はよくさういふ打ち方を真似たがるものですが、これは慎むべきことです。元來スマッシングそれ自身が充分に攻撃の威力を持つてゐるものなのですから、打ち込まれた方は打ち込まれただけで既に防禦の位置にあります。ですからそれを打ち返されたとしても、次のボールによつて充分得點することができなのです。ゆゑにスマッシングはなるべくコートの中中央にスマッシングすることを心懸け、相手の陣が亂れてコートに隙ができたときは、そこへ打ち込むやうにするのであります。

(2) 肩より上のヴォレー

普通いふところのヴォレーは、スマッシングを除いた、この肩より上のヴォレーをいふのであります。ラケッ

トの持ち方は普通のストロークと同じで、直線のボールを打つには、いつも右肩の前方でラケット面がボールと垂直或は幾分下を向くやうにし、當て氣味にして打つのです。強いボールのときには、たゞ當てればよいのです。また相手の右コートにクロスに打つには、やゝ前方でボールをとり、その反対の方向に打つにはやゝ後方にボールをとつて打たねばなりません。總てこのヴォレーには、前腕（手頭より肘までの部分）が上腕（肘より肩までの部分）より多く用ひられます。これはヴォレーの性質上、短いボールを打つためであります。ヴォレーをする姿勢はスマッシングの如く上體も反さず、腰も落さず、棒立のやうな姿勢でボールを打つと同時に身體が前方にのめるやうになります。足の構へは、身體が常にネットに對して斜に對するやうにし、左足を前、右足を後にし、開き方はスマッシングよりも少し狭めます。打球の際の重心の移動も完全にやるやうにせねばなりません。なほヴォレーをするときは、ラケットを振り廻したり、無闇に打つたり、足を地上から離して飛び上るやうなことをせず、なるべくネット際に前進し、急角度の決定的のヴォレーをなさねば、攻撃的であるヴォレーの意味をなさないのであります。

(3) 肩より下のヴォレー

肩より下、ネットより上即ち肩の邊に飛んで来たヴォレーもまた多く使用されるヴォレーであり、そしてむ

づかしいものであります。このヴォレーは多くは直球でありますから、ラケット面はボールと垂直になるやうに、即ちラケット面は地面と垂直になるやうにラケットを出し、肩より上のヴォレーの要領で打つのです。このときの足の開き方は、前のヴォレーのときよりもやゝ大きくし、腰も幾分下してやらねばなりません。そして肘はバックのときでもフアーのときでも、身體に殆どつ

けるやうにし、前腕を以て當てるやうにします。この場合腕を全部伸してやるやうでは、ボールは到底うまく打てません。遠いボールなら身體を近づけて打つのです。

(4) 腰より下のヴォレー

このヴォレーは普通ロウ・ヴォレーと言はれるもので、ヴォレー中一番むづかしいものであります。他のヴォレーが攻撃的であるのに、このヴォレーはむしろ防禦的です。前進する足下に低いボールを落されたら、それをどうして返して、自分の陣を立直すかを考へて、ロウ・ヴォレーをせねば



第五圖……ウロ・ヴォレーの構方

なりません。ボールを打つ姿勢は兩足の膝を屈し、腰を下して、丁度バネ仕掛のやうに、そして幾分前へのめり氣味になり、ラケット面が斜上方を向くやうに出してボールに中てます。フォアに來たボールなら、丁度ボールを抱へこむやうな姿勢になるのです。また前方に來たボールなら、丁度ラケットを前方に投出すやうにしてボールに中てます。このロウ・ヴォレーの眼の位置は、いつもボールの高さと平行するくらゐに身體をかゞめます。これはボールの高さや、バウンドの方向を確實に知ることができるのであります。

(5) ストップ・ヴォレー

右に述べた總てのヴォレーを通じて、相手の球の球勢を殺ぎ、ボールをネット際に、チヨ、コリと落すヴォレーの打ち方で、前進した際に必要な打ち方があります。この打ち方は、ボールを腕を用ひて打つことをせずに、手頭だけを働かして、ボールを引き加減に打つのであります。否むしろ中てるといつた方が至當であります。肩邊に來たボールで、相手の隙を狙つてよく用ひられる打法であります。

(6) ショート・バウンド

ショート・バウンドはハーフ・ヴォレーのことで、ボールが地上からバウンドするや否や、ラケットを直角に押氣味に當てるのです。ボールの速度が速いときには、バウンドが低いものでありますから、ラケットの面をやゝ上方に向け、ボールの速度が緩いときには、バウンドは高く上るものですから、ラケット面を下方に向けて打たねばなりません。しかしそのボールの性質や速度によつて、ラケットの出し方は違つてきます。この打法は、全く防禦的であり不確實のものでありますから、平常この打法によつて球をとることは避くべきであります。

一三、 ロップの擧げ方

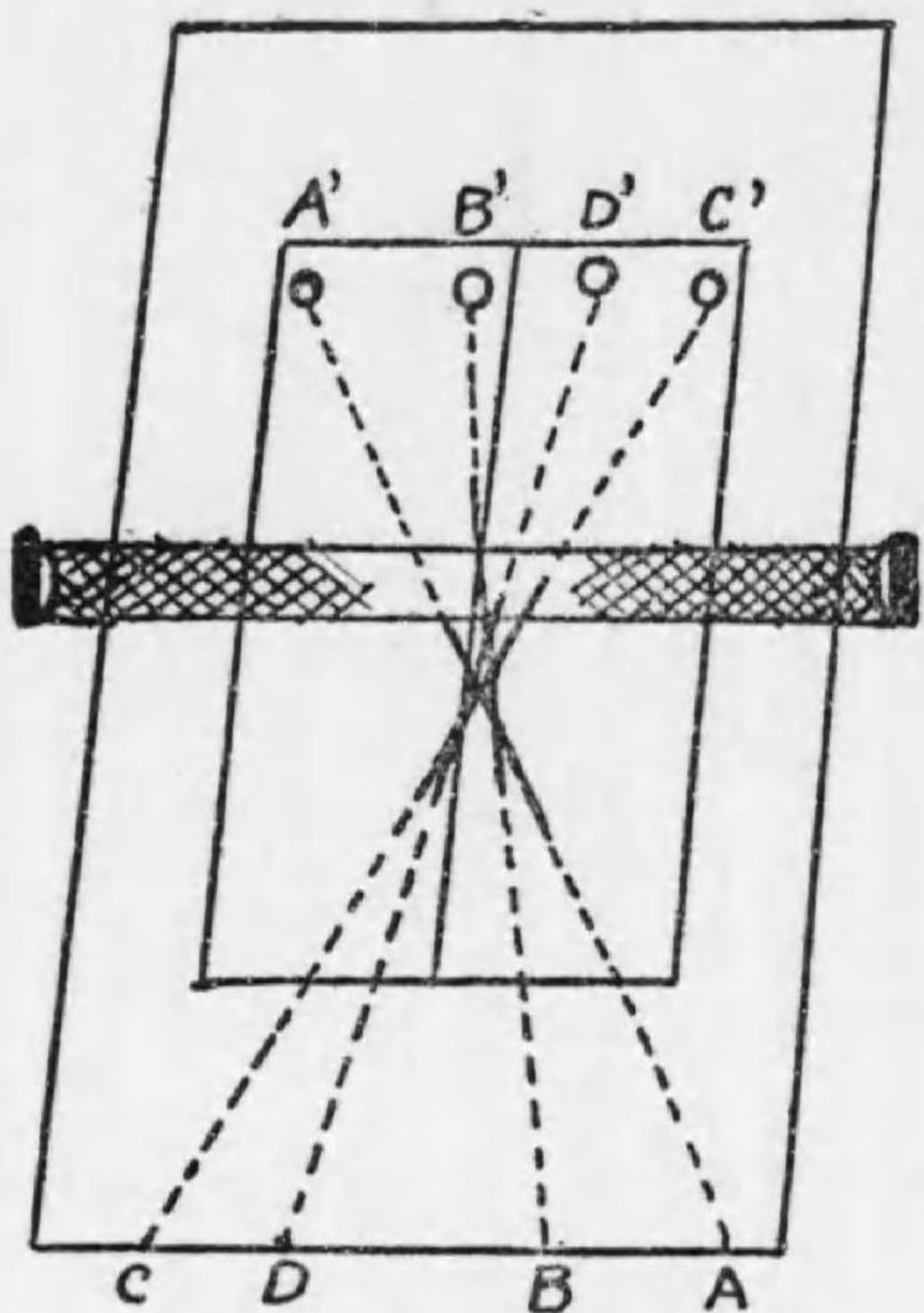
ロップは、ボールを高く擧げて、相手の攻撃を避ける防禦の打ち方であります。相手がネット際に前進して來たとき、その頭上を越してその攻撃を避けるとか、または自分の方が窮してしまつて、たゞこのボールを安全なところに打つて、自分の陣を立て直さうとするやうな場合に、必要なボールの打ち方なのであります。ラケットの持ち方は普通のストロークのときと同じく、バウンドして二三分落下したところを、ラケット面を上方に向けて押し氣味に打ちます。ベース・ライン近くに來たボールは、可なり強く打つた積りでも、前衛にとられるやうなネット際のボールとなるものですから、可なり力を入れて打つやうにすべきであります。このロップは硬球のダブルに於きましては、殊に大切な打法であります。

一三、サーブとレシービング

(1) サーブ

サーブは、試合開始であると同時にまた攻撃の第一球でもあります。このサーブの優劣は、自分の方を有利の陣に導くか、或は初めから不利の形勢に陥れるかの大切なものであります。このサーブの打ち方は、軟球に於ては二つに分けることができます。その一はラケットをボールの上後側面から打ち下すもので、他の一つは、ボールの側面或は下面をカットしてボールに廻轉を與へ、ボールのバウンドに變化を與へしめる打法であります。従つてこの打ち方には、ラケットを下方から上方に、擦り上げるやうな打ち方もあります。しかしこのサーブの法は、一般にボールのバウンドに變化を與へるものではありませんが、ボールに速度がなく、かつ狙ひが不正確でありますので、サーブとして威力あるものではありません。従つて初心者は初めからボールをカットすることは避くべきであつて、私は初心者の學ぶサーブの法としては、カットしないでボールを打ち下す前者のサーブの打ち方をお勧めいたします。

打ち方はスマシングの要領で左手に持ったボールを軽く、稍前面上方に二三尺投上げます。このとき左肩はネットの方へ向きます。そしてボールが、ラケットを伸して丁度その中央で打つところに落下したときに、ラケット面を稍下に向けて、真直に打ち下すのです。このときの足の構へは、左足をベース・ラインと稍斜に對し、右足を約一尺乃至一尺五寸からの後方に引きます。ボールを投上げると同時に、身體を幾分反り身にし、適度の高さにボールが落ちて来たところを、充分身體と腕を伸して、相手のコートを狙つて力強くラケットを打ち下すのです。このときの打ち下されたラケット面は左足の前で地面と對します。このサーブをやるときは、重心の移動を完全に



第六圖……サーブの入り方

するやうにすれば、一層ボールに速度をつけることができるのであります。殊に硬球のサーブに於ては、この足の構へ、重心の移動は大切な心得であります。

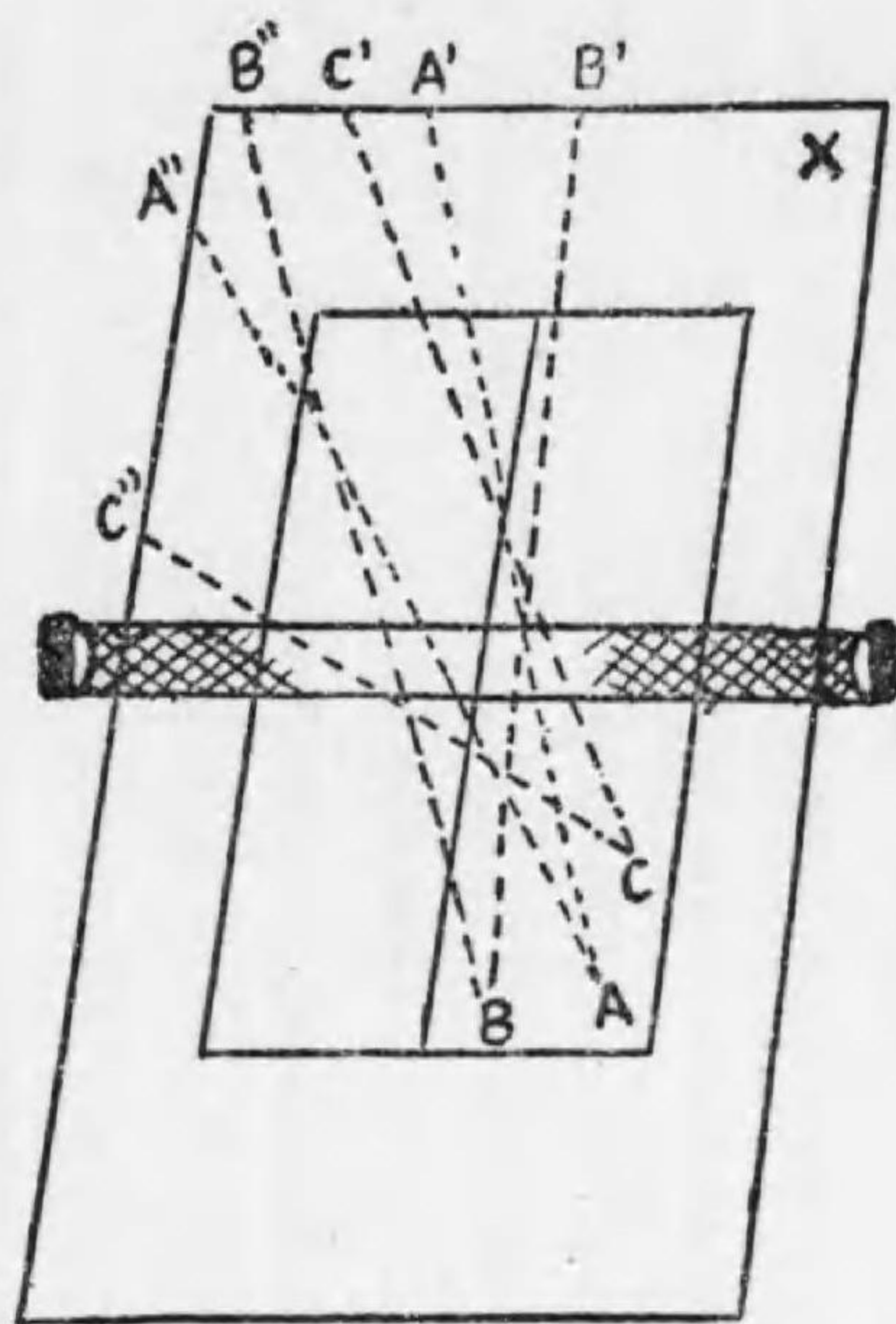
然らばサーブは、何所に入れたらよいかと申しますと、サーブは攻撃の初球であることを常に念頭において、相手の不得意なところ、若くは相手の隙を見つけて入れるやうにします。例へば相手がバックの不得手な人なら、なるべくバックの方に入れるやうにし、右コートなり左コートなりを餘り空けてあるやうな人には、その隙に入れるやうにします。この自分の思ふところにボールを入れようとし、サーブをする自分の位置にも關係します。A' 點に入れるにはAに、B' 點に入れるにはBに、C' にはC、D' にはDの位置で打つのが一番容易な打ち方であり、これは原則であります。その人の技倆次第で、何處へでも打てるやうになるのですから、よく考へて、そこへ入れるやうにサーブすべきであります。

なほ注意すべきは第一サーブを無闇に強く打ち、第二サーブは、極めて貧弱なボールを入れる人をよく見受けませんが、これではサーブ本来の意味を全く失ふばかりでなく、相手に攻撃し易いボールを與へることになりますから、かゝる緩球を入れることなく、なるべくならば第一サーブも、第二サーブも同じ強さで打ち、正確に入れるやうにすべきであります。第一サーブを安全に入られると、前衛は相手から攻撃される不安が少く、いつも攻撃に立つてゐられるのであります。サーブの練習の際は、自分の思ふところに入れることができるやうに、常に練習いたさねばなりません。

(2) レシービング

サーブを受け返すことをレシービングと申します。サーブが攻撃の意義を持つものである以上、レシービングは防禦の打ち方であるといふことを心得ねばなりません。従つて強い球でも弱い球でも強く打つといふことは避けねばなりません。まづ安全に返すといふことを念頭におくべきです。しかしレシービングの如何によつては、直ちに得點することができるとは、防禦の陣を變じて攻撃の陣に移ることもできるのであるから、たゞ安全に返せばいゝといふことだけでなく、更に機會を得て攻勢に出ることが出来るやうな準備が必要です。それには相手の不得手なところにボールを送るとか、相手の隙を狙つて返すとか、相手の動作を観てその裏をかくとか、或はチビリ、或はロップと臨機應變の打法が必要です。しかしながらこのレシービングに於て注意すべきことは、餘りに攻撃に焦つてはならないといふこと、常に深い球を返すといふことです。普通の陣形に於ては、レシーブするに方つて最も自然な返し方は、圖に示すやうにA' 點に入つたときはA' 點若くはA' 點、B' 點に入つたときはB' 點若くはB' 點、C' 點に入つたときはC' 點若くはC' 點です。またC' に来たときはX' 點にロップするも有効です。なほこのボールを返す方向に就いては、ボールの如何によるもので、そのボールに就て、いち／＼研究すべきであります。

レシーヴィングする位置は、ボールの強弱にもよりますが、第一サーヴィスのときは、サーヴィス・ラインの後方一聞くらゐのところに位置し、第二サーヴィスのときは、現在のところ多くの人の第二サーヴィスは、概



第七圖……レシーブの方

して弱いものでありますから、第一サーヴィスの位置よりも稍前進します。このときの姿勢は、軽くラケットを持った右手を前方に出し、左手は軽くラケットの柄のところに當て、兩足を稍開き、兩爪先で軽く立ち、幾分前こごみの氣味で、後から押されたら前方へのゆるやかな姿勢です。この姿勢は、ボールが何處へ落ちやうとも、すぐスタートできるやうにしてゐるのです。このときの眼は、相手の一擧手一投足をも決して見逃さないやうに、相手の動作に見入つてゐます。そしてボールが來たらば、その方に前進して一旦止り、フォアーなりバックなりの身構へで、ボールを自分の思ふところに返し、直ちに自分の位置に就くのです。

一四、ゲームとカウント

(1) ゲームの方法

いままでの軟球競技は、ダブルだけでありましたが、新規定によれば硬球競技の如く、シングルの試合も新に規定せられたのであります。ダブルは二人が一組となつて一組宛戦ふもので、シングルは一人宛が戦ふのであります。従つてシングルのときのコートは、ダブルの兩側に於て四尺五寸二分五厘宛狭められます。試合は、まづどちらがサーヴになるかを定めます。このサーヴをする方を定めるには、トスといつて、一方がラケットの柄の端を持つて、ラケットを地上に廻し、他方がその表(スムース)裏(ラフ)、いづれかをいひ當てます。そしてそのラフかスムースかをいひ當てた方がトスの勝者となり、サーヴィスでもサイドでも先に選ぶことが許されるのです。このとき勝つた人がサーヴィスを選べば、負けた人はサイドをとります。また勝つた人が風向や光線などの關係で、先にサイドを選べば、負けた人はサーヴィスをするようになります。です。かくしてサーヴィスなりサイドなりが定まつたら、審判者の『プレー・ボール』によつて、初めサーヴ

組のサーブ・サービスによつていよく試合は開始されます。乃ちレシーブ・サーブは、サーブ・サービスのなされたサーブ・サービスを受け返し、かくて両方がお互に打ち合ひをして、規則によつて得点するなり、失点するなりすることによつて、勝負が決せられます。なほこのゲームに就て知つておかねばなりませんことは、サーブ・サービスのことです。従来は、サーブ・サービスは後衛がするものと定つてをりましたが、こんどは前後衛とも交互にすることになりました。例へばA B組とC D組とがテニスをする場合、第一回のゲームにAがサーブ・サービスになつたら、第二回のゲームには、Cがサーブ・サービスになり、第三回はB、第四回はDがサーブ・サービスになるのです。一組のうちどちらがサーブ・サービスになつてもその順番は構ひませんが、一ゲーム中は同じ人がいつもサーブ・サービスをせねばなりません。またサイドの變更も注意すべきで、第一回のゲームが終つたときにサイドを變更します。このサイドの變更は第三回以後は、三、五、七、九の如き奇数のゲームを終つたときに、必ず變更して行きます。このサイドの變更は、風向や光線の關係から新に硬球のゲームの如く規定せられたもので、ゲーム上からいつでも極めて大切なことでもあります。

(2) カウンツの仕方

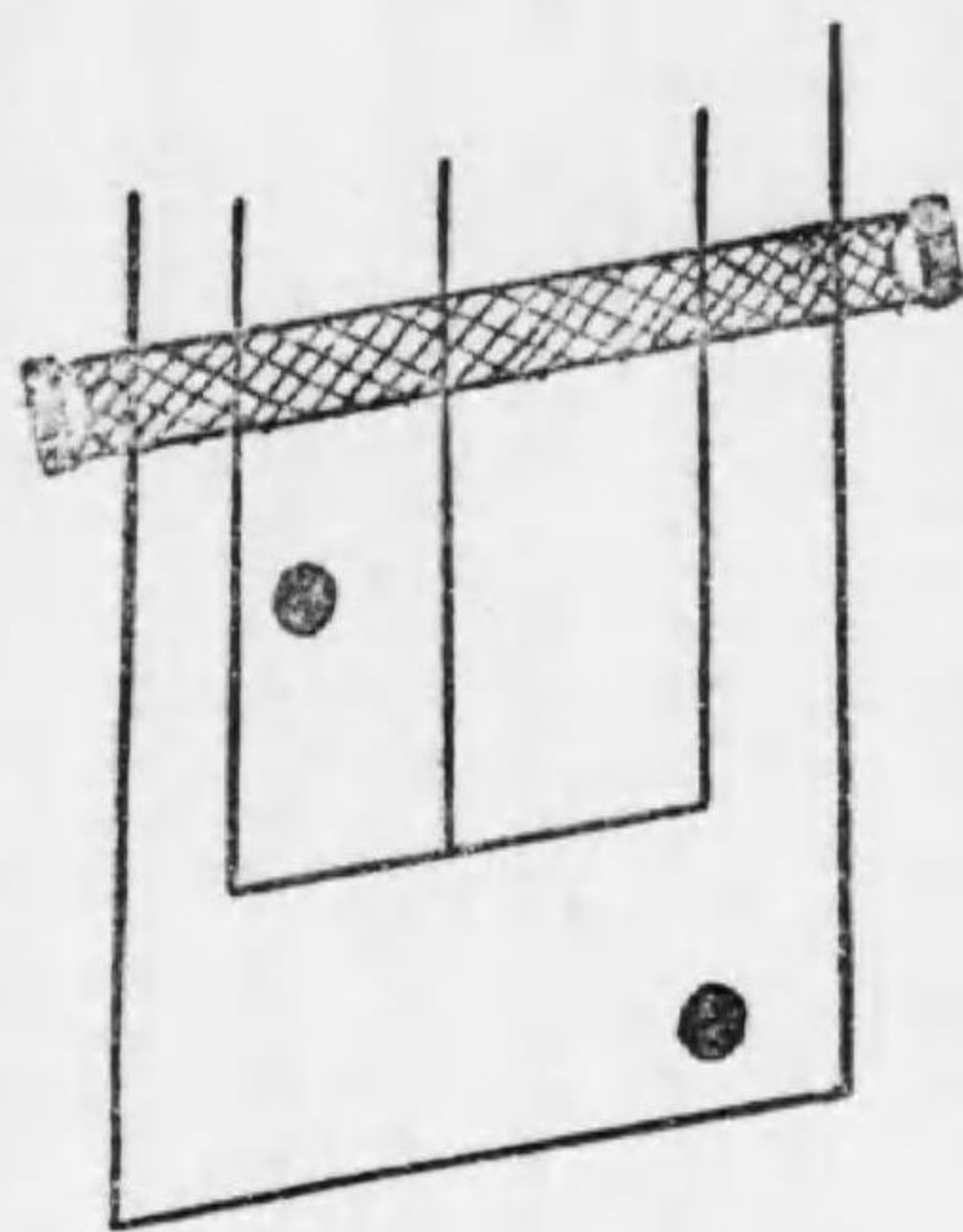
カウンツ即ちポイントの計算は従来は失点を數へて行きましたが、新規定では、硬球の如くにサーブ・サービスから得点を以て數へて行くことになりました。即ちサーブ・サービスが一點を得ればワン・ゼロとなり、ゲーム・ワン・ツウといへば現在サーブ・サービスをする方がワンで、レシーブ側がツウの意味であります。そして第一回目にサーブ・サービスした方は、いつまでも先に呼ぶのであります。ゲームのカウンツも亦このカウンツの仕方と同様であります。

一ゲームの勝負は、先に早く四點を得た方がそのゲームの勝者となります。但し双方とも三點宛を得たときは、そのいづれか一方が、先に續けて二點を勝ち越さねばなりません。それで二點續けて得点しなければデュースとなつて、何度でもデュース・アゲンを繰り返して行くのであります。また一勝負は、七回ゲームを標準としてありますので、いづれか一方が早くゲーム四回を勝つたときに定まります。このときもゲームが双方三回宛のときは、ポイントのカウンツのデュースの如くで、その後一方が先に續けてゲーム二回を勝ち越さねばなりません。ですからそのスコアは、四―〇、四―二か、或は五―三、七―五、九―七の如くなる譯であります。なほカウンツの呼び方に就ては、規則のところを御参照くださいませ。

一五、前衛と後衛

(1) 前後衛の任務

新しい規定によりますと、前衛も後衛もサーヴィスする事になりましたので、或る時には前衛にならねばならず、或る時は後衛をしなければならなくなりました。従つて前衛は前衛だけの働き、後衛は後衛だけの役目をしてをればよいといふ譯には行かなくなりました。即ち従來のやうに、分業的に前衛、後衛と定つた人が無くなる譯であります。しかしながら前衛後衛の任務やその陣形及び位置などに就ては、大體現在行はれてゐますものと變りはないのであります。然らば前衛と後衛とは、どんな違つた働きを持つてゐるかと思はれますと、前衛はネット際數歩のところ位置して、相手方から來た球をスマッシュやヴォレーによつて攻撃する役目であり、後衛はサーヴィスをして戦ひを開始し、ベース・ライン即ち後方にあつて相手と打ち合ひ、相手の後衛を攻めると共に、自分の前衛をして思ふ存分活躍させるやうにするのであります。従つて前衛は丁度歩兵や騎兵の如きものであり、後衛は丁度



第八圖……前後衛の位置

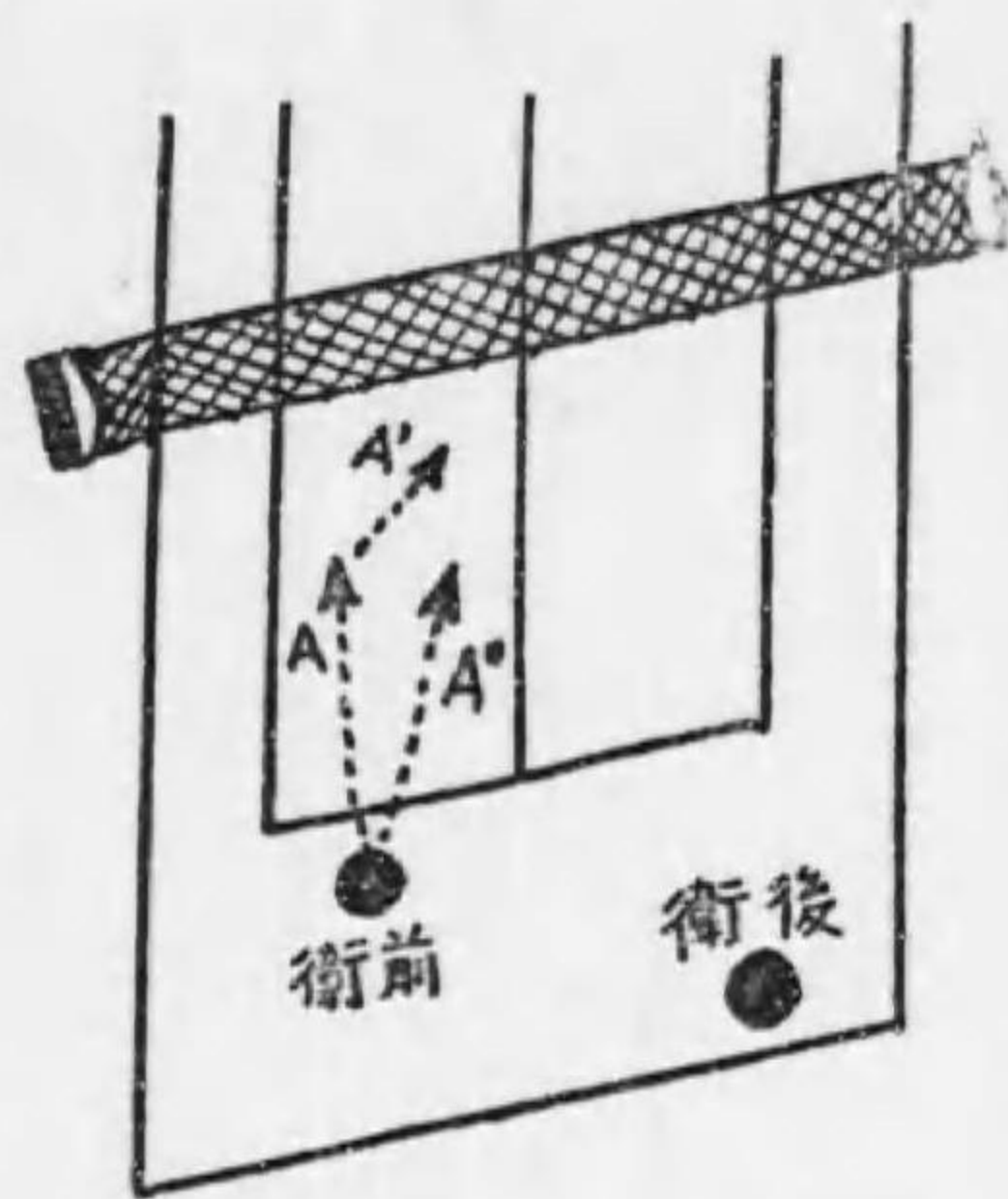
歩兵の如くまた砲兵の如きものであります。即ち前者は堂々と敵に對して肉弾戦を演じ、またその虚を見ては横合から突撃を加へます。後者は正面から堂々と攻め寄せる一方、また間接射撃によつて味方を進軍せしめます。前衛と後衛とが、右の如く攻撃と防禦の關係に立つ以上、前衛に立てばスマッシュやヴォレーを多くせねばならず、後衛になれば正確なストロークをするやうにせねばなりません。軟球に於きましては、どうしても前衛と後衛とに分れてコートに立ち、攻撃と防禦の任務を盡す陣形が最も適當なものとされてをります。この陣形は、大雁行陣とも言ふべく、前衛はネット際、丁度ネットを越して相手のサーヴィス・ラインが見えるところ、圖の如き位置に立ちます。後衛はベース・ラインの附近右寄りに位置します。また二人が平行して位置する平行陣などもあります。この他の陣形に就ては、今後の研究に俟たねばなりません。

(2) 前後衛の位置と動き方

前後衛の任務がそれごとく定り、陣形がほぼ定つた以上は、後衛はベース・ライン附近に位置します。大體はベース・ラインの内一尺くらゐが適當な位置ですが、それもボールの深いのと短いのとによつて、それごとく前へ出たり或は退いて位置すべきであります。そして後衛の動き方は足の構へ全體の動作が大體に於て、大

きくするのであります。

前衛はサーブ・ス・側の場合とレシーブ側の場合とで、その位置が違つてきます。レシーブ・ス・サイドのときは、相手からの直球レシーブに備へるために、普通ネットから一間半か二間くらゐ、そして左コートに立



方み進の衛前……圖九第

位置と同様ですから、『サーブ・ス・の項を御覽ください。

更に前衛の動き方は最も大切なことでもあります。自分がレシーブして前進する場合は、殊に研究しておかねばなりません。この前進の仕方はレシーブしたボールの方向にもよりますが、斜にレシーブしたと

しますれば、圖に示しますやうに、レシーブした位置からまづA点に進むやうにします。それを直にA'点の方向に向つて前進するときは、どうしても左が空きますので、よく左を抜かれるのであります。この抜かれることを防ぐために、前者のやうな前進法がよいのであります。しかしその前進に際しては、圖の如く角度をつけて進むのではなく、その氣持を以て前進し一刻も早く前衛の位置に就くのです。この一刻も早く前進するといふことは、それだけ攻勢に自分を置くことになるのであります。ところが多くの前衛は、この前進を早くせず、途中で止つてあるやうなことをし、足下に狙はれてよく失敗するのであります。婦人の方は殊に前進が遅いやうであります。

なほ前衛の動作によつて或は相手を威嚇萎縮せしむる牽制、或は相手の裏をかく誘ひの隙など、モーションの種類がありますが、これ等はボールや位置などによつて千差萬別なものですから、これは頭腦を働かせて銘々が研究すべきものであつて、敢て茲には述べませぬ。

(3) 前後衛の連絡

前衛と後衛の技術が如何に巧者であつても、兩者に連絡が缺けてゐたならば、その組は決して強い組ではありません。兩者の技術が劣つてゐたとしても、兩者の連絡が完全であるならば、その組は組として強いので

であります。殆どダブルを主とする軟球に於きましては、この兩者の連絡はゲームに際して最も大切なこと
であります。この連絡をとるためには、各自が銘々に行動してはなりません。一心同體となり、手となり足
となつて、完全な一つの組として行動せねばなりません。一絲紊れず二人がコートに隙を作らないやうにす
るのです。例へば前衛が後衛の前でスマッシュなりヴォレーなりをしようとするときは、後衛は反対の方に
走つてその空虚を防がなければなりません。また前衛の頭上を越してヴォレーされ、後衛がその方に走つて
行つたときは、前衛はその反対の方に走つて防禦の位置をとらねばなりません。かく隙のない連絡をとるた
めには、自分のパートナーの性質をもし知り合ひ、またその長所短所をもし知り盡して、その長所はいよく發
揮させるやうにし、その短所はこれを補ふやうにいたします。例へば二人で前進した場合、スマッシュの球が
來たらば、スマッシュの得意の方がなるべくこれを取るやうにし、二人が後退した場合に、二人の中央に
ボールが來たならば、ストロークの正確な方に委すやうにします。但しこの場合はいづれか決して無理を
してまで取るやうなことをしてはなりません。このボールを讓る場合には「ユアース」とか「マイン」の呼
稱によつて、どつちかゞとるやうに決めておきます。然しこれ等はどうしても長い間の二人の練習の結果、
自然にさうするよりほかはありません。また二人が氣心を合せるといふことも大切なことです。それには平
常でも親密にするは勿論、コート上にあつてはお互が信頼しきつて、二人の意氣がピッタリと合つて相手に
對さねばなりません。肝心な球をアウトしたからとて怒り、ダブル・フォールトしたからとて不平を言ふやう
であつてはなりません。かゝる時はむしろパートナーを慰め、かつ激勵するやうにいたします。パートナー
に對する疑ひの心は、組としての協同動作の破綻の因であります。心と心との結合、これが前衛と後衛の連
絡上の第一の要素であります。

▲軟球の規則——(明治神宮競技大會規定)

第一 ダブル・ゲーム

コート

第一條 コートは左の如く規定す。

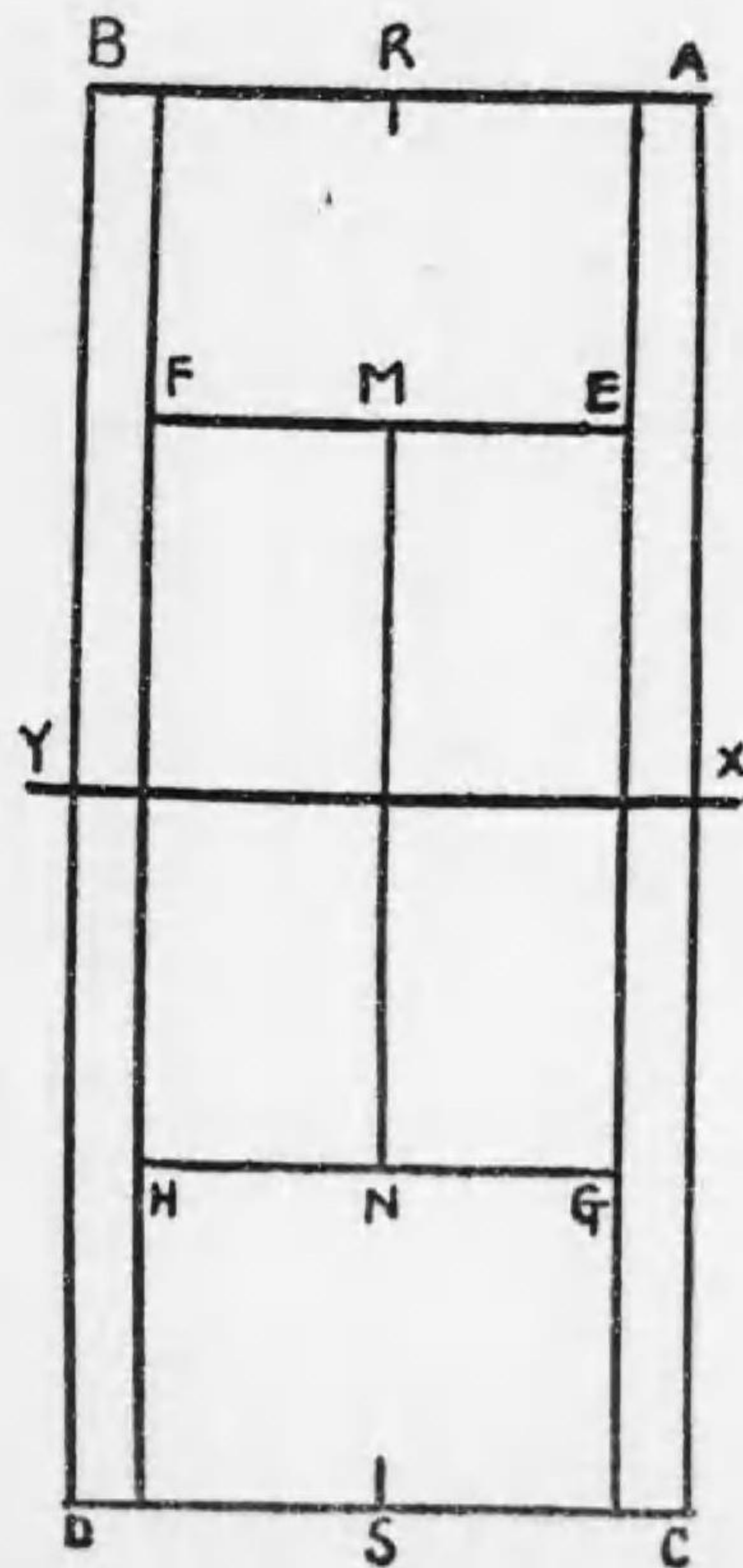
アウト・ライン

CABA
DBDC

…サイド・ライン
…ベース・ライン

二十三米七七
十米九七

イン・ライン $\overbrace{M N \dots}$ ハーフ・コート・ライン 十二米八〇
 $\overbrace{G E F E \dots}$ サイヴイス・サイド・ライン 十二米八〇
 $\overbrace{H F H G \dots}$ サイヴイス・ライン 八米二三
 センター・マーク RS
 ネット・ポスト XY 十二米一九二



トーコのルブダ……圖十第

但しコートの區劃はアウト・ラインの外側を以てす。

第二條 ラインの幅は六・六〇センチメートル(約二寸)を標準とす。

ネット・ポスト

第三條 ネットは左の條件を具備することを要す。

- 一、サイド・ラインの中央に張りその延長はポストの外側より他のポストの外側まで一二・一九二米とす。
- 二、高さは兩端に於て一・〇六米(三尺五寸)とし、なるべく水平に張る可し。
- 三、充分の長さ及幅を有し、兩ポスト及コート面に密接せしめ、上端には幅六・〇六センチメートル(二寸)の白布を附し、網目は三・〇三センチメートル(一寸)以下たる可し。

第四條 左右のポストはネットと同高にして、兩サイド・ラインより同一距離とす。

ボール

第五條 ボールはゴム球とし直徑六・二五センチメートル(二寸一分五厘)乃至六・五四センチメートル(二寸二分) 圓周二〇・四六八センチメートル(約六寸七分五厘)乃至二〇・九四四センチメートル(約六寸九分一厘) 重量三二グラム(約八分五厘)乃至三三グラム(約八分八厘)を以て標準とし、一米半(約五尺)の高さよりコート上に落し、五〇・センチメートル(約一尺六寸五分)以上の高さにバウンドするものたる可し。

審判

第六條 審判者は對抗試合の場合に在りては双方のキャプテン合議の上、大會の場合に在りては、その委員之れを定む。

第七條 審判者はプレーヤー以外の第三者たる可し。

第八條 審判者は六名とし内一名を正審一名を副審、外四名をライン審判者とす。但し場合によりてはライン審判者の數を減することを得。

第九條 正審は本規則に據り競技の進行を掌り、他の審判者を適所に配置して判定の責とす。

第十條 ボールのイン、若くはアウトはボールの落下點を以て判定す可し。但しボールがラインに觸れたるときは、そのラインにて劃するコート内に入りたるものと認む。サーヴィスの場合も亦同じ。

ゲーム

第十一條 プレーヤーは二人を以て一組とす。

第十二條 プレーヤーは互にネットに對し反對のサイドに立つ可し、ゲームに際し最初ボールを打ち出す組をサーヴァーと稱し、他をレシーヴァーと稱す。

第十三條 ゲーム開始に當り、サイド又はサーヴィス若くはレシーヴァの選擇は、トッスにより之を定む。トッスの勝者サーヴィス若くはレシーヴァを選びたるときは、他者はサイドを選ぶ。勝者がサイドを選びたる時は他者はサーヴィス若くはレシーヴァを選ぶ可し。

第十四條 第一回のゲームを終りたるときはサイドを變更するものとす。第三回以後奇數のゲームを終りたるるとき亦同じ。

第十五條 プレーヤーは正審の『レディー』により、各自その採る可き位置につき、『プレー・ボール』によりゲームを開始す。

第十六條 カウントは、得點を以て、サーヴィス・サイドより之を數ふ。ゲーム・カウントも亦同じ。

第十七條 一ゲームの勝負は、一方が早く四點を得たるときに之を決す。但し双方三點宛を得たるときは、その何れかゞ先に續けて二點を勝ち越したるとき勝負を決するものとす。
點の計算法は左の如し。

一方のみが一點を得たる場合……ラン・ゼロ又はゼロ・ラン

一方のみが二點を得たる場合……ツウ・ゼロ又はゼロ・ツウ

一方のみが三點を得たる場合……スリー・ゼロ又はゼロ・スリー

双方一點宛を得たる場合……ワン・オール

双方二點宛を得たる場合……ツウ・オール

双方三點宛を得たる場合……ザ・サー

一方が二點を得、他が一點を得たる場合……ツウ・ラン又はラン・ツウ

一方が三點を得、他が一點を得たる場合……スリー・ワン又はワン・スリー
一方が三點を得、他が二點を得たる場合……スリー・ツウ又はツウ・スリー

ゲームの後一方が一點を得たる場合……アドヴァンテージ・サーヴァー又はアドヴァンテージ・レシーヴァー
一、ゲームの後双方一點宛を得たる場合は再びゲームとなる。

第十八條 勝負は七回ゲームを以て標準とし何れか一方が早くゲーム四回を勝ちたる時に決し、双方ゲーム三回宛を得たる時は、その後一方が先に續けてゲーム二回を勝越したるときに決するものとす。但し對抗試合に於てはキャプテン、大會に於てはその委員、豫め合議の上ゲーム數を省略することを得。

第十九條 ラケットは同時に二本以上持つことを得ず。

サーヴィス

第二十條 サーヴィスは之をなすの意志を以て、手よりボールを離したるときに始まり、地上に落ちざる前にラケットを以て之を打ちし瞬間に終るものとす。

第二十一條 サーヴィスはネットに向つて右側より始め、對角線上にあるサーヴィス・ボックス内に入る可きものにして、左右交互に之を行ふものとす。

第二十二條 サーヴィスはベース・ラインの端とセンター・マークとの間に立ち、停止の状態に於て兩足をライン外に置き、少くとも一脚を地に着けて爲し終るべきものとす。

第二十三條 サーヴィスは其の組の内何れの者がなすも隨意なれども、一ゲーム中に於ては交替するを得ず。

第二十四條 初めにサーヴィスす可き組にありては、何れの一人が初めにサーヴィスすべきかを定む可し。他の組も亦次のゲームにサーヴィスすべきものを定むべし。而して初めにサーヴィスせる組の他の一人は第三のゲームにサーヴィスすべし。第二ゲームにサーヴィスせし組の他の一人は、第四のゲームに於てサーヴィスすべし。斯くの如き順序に於て交互にサーヴィスを行ひ、その順序を變更することを得ず。

第二十五條 レシーヴァーは一ゲーム中に於てはその位置を變更することを得ず。

第二十六條 レシーヴァーの用意無きときに爲されたるサーヴィスは、總てノー・カウントとす。但しレシーヴァーの用意の有無は正審の判定に委す。

第二十七條 次の場合はフォールトとす。

- 一、サーヴィスせるボールが直接にサーヴィス・ボックス内に落ちざる場合。
- 二、サーヴィスせるボールが他のインプレーヤーのラケットまたは身體、着物、所持品に觸れたる場合。
- 三、第二十一條及び第二十二條に違反せる場合。

第二十八條 サーヴィスせるボールが、ネットまたはその附屬物若しくはポストに觸れて、一サーヴィス・ボックス内に落ちたる場合は、レットと稱し、ノー・カウントとす。

第二十九條 續けて二つのフォールトを爲したるときは一點を失ふ。

第三十條 次の場合に於てサーヴァーは一點を得。

- 一、レシーヴァーがライト・サーブイス(正しいサーブイス)を受け損じ、または球がネットを越さず、若しくはアウトせるとき。
- 二、他のアウト・プレイヤー(相手の組)に向つて爲されたるライト・サーブイスを受けたるとき。
- 三、サーブイスが地に落ちざる前、直接にアウト・プレイヤーのラケット、または身體、着物、所持品に觸れたるとき。

ボール・イン・プレー

第三十一條 次の場合に於てプレイヤーは一點を失ふ。

- 一、打返せるボールがネットを直接に越さざるるとき。但しポストの外側を廻り、或は之に觸れて入れるボール、及びレット・インは有效とす。
- 二、ボールがアウト・ライン外に落ちたるるとき。
- 三、コートに二度バウンドしたる後打ちたるるとき。
- 四、ボールを打つとき、同一ラケットに一度以上觸れたる場合、または一旦イン・プレイヤー(味方のプレイヤー)のラケットに觸れたるボールを更に打ちたるるとき。
- 五、ボールが審判者の身體、着物、所持品または競技のために特に設けられたる物體に當れる場合。但

し自然物に對しては豫めコート・ルールを定め置くことを要す。

- 六、ボールがプレイヤーのラケット以外の部分即ち身體、着物、所持品に觸れたる場合。
- 七、ラケットまたは身體、着物、所持品等をネット若しくはポストに觸れたる場合、またはラケットが手より離れてネットまたはポストに觸れまたは之を越せるるとき。但しネットを越せるボールをヴォレーしたる爲めラケットまたは身體の一部がネットに觸れずしてオーバーしたるときは有效とす。
- 八、ネットを越さざる前にボールを打ちたるるとき。

第三十二條 次の場合はノー・カウントとす。

- 一、不時の出來事または第三者の妨害により競技を妨げられたる場合。但し不時の出來事または第三者の妨害なりや否やは正審の判定による。

- 二、正審が有效なるべきボールを失點と誤審したる爲め、その誤審を正す場合。

第三十三條 コート外に於てもボールが直接にラケットまたは身體、着物、所持品に觸れたるときは、アウトにあらず、有效とす。

第三十四條 プレイヤーは競技中に休息することを得ず。

第三十五條 プレイヤーは何等の事故を以てするを問はず、正規時間より十分間を経過するも、尙ほ競技を爲すこと能はざる場合は棄權したるものと見做す。

第三十六條 天候其の他の事由によりて、正審が競技の延期を宣告せる場合には、そのスコアは有効とし、競技再開のときは、その儘續行し、試合を終る可きものとす。

第三十七條 正審は左の行爲をなしたる組に對し一點を失ふこと、またはその組の敗若くはそのチームの敗を宣告することを得。

一、ゲーム開始後正審の宣告に従はずして一方の組がゲームを續行せざる場合。

二、一方の組がボール・イン・プレー以外の方法によりゲームを長引かしめんとする行爲ありたる場合。

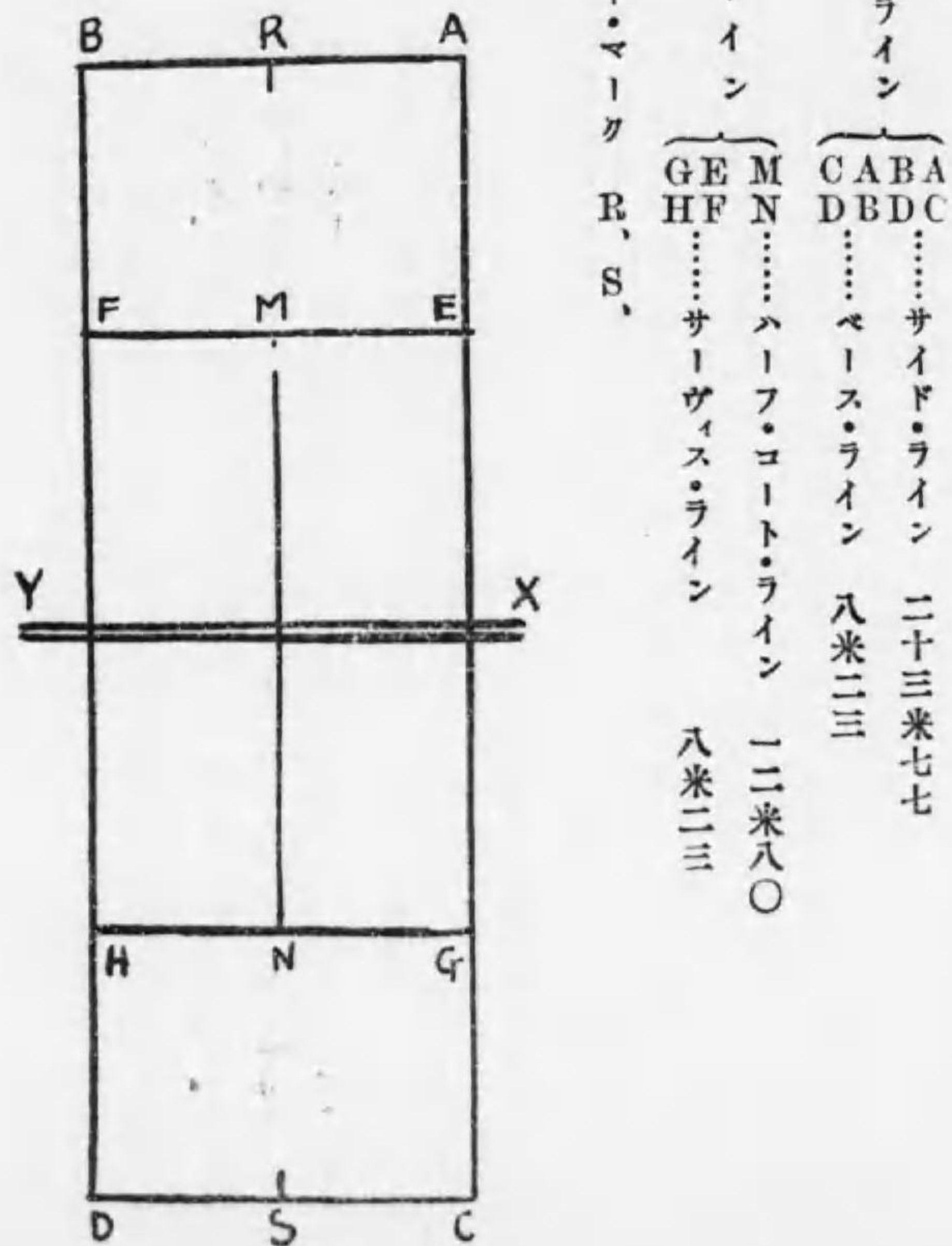
三、その他一切ゲームの進行を妨害すべき行爲ありたる場合。

第三十八條 正審の判定は、如何なる場合に於ても、次のサーヴィスが爲されたる後は、遡つて之れを訂正することを得ず。

第三十九條 この外競技に關し、規則外の事故生じたる際は、從來の慣例による。但し慣例なきときは正審及び双方のキャプテンまたは大會委員會議の上之を處理す。

第二 シングル・ゲーム

第四十條 コートは左の如く規定す。



アウト・ライン …… サイド・ライン 二十三米七七
CABA DBDC …… ベース・ライン 八米二三

イン・ライン M N …… ハーフ・コート・ライン 一二米八〇
GE HF …… サーヴィス・ライン 八米二三

センター・マーク R, S,

トールゲンシ……圖一十第

ネット・ポスト X、Y……九米七三

但しコートの区劃はアウト・ラインを以てす。

第四十一條 第一條、第三條第一項の末段、第十一條、第二十四條、第二十五條、第二十七條第二項及び第三十條第二項を除く外、本規則及び附則は之をシングル・ゲームに適用す。

附則 なほ試合の方法や審判臺の位置（ポストの外側より六〇六・七センチメートル）、トッスの方法、シングル・コートはダブル・コート及びネットを代用することを得ることや、新規定を大正十五年度より實施することなど、附則として六ヶ條を擧げてありますが茲には略します。

硬球

一、軟球から硬球へ

軟球にも硬球にもそれと違つた面白味がありますが、さてどつちが面白いかと訊かれましたら、私は硬球の方が遙かに興味があると申しませう。軟球は今迄に可なり研究せられ、改良せられて、現在のものが最上のもとなつたのでありますが、それで何となく物足らないものがあります。このことはプレーヤー自身が言ふところであり、また軟球を見る人が言ふところでもあります。これは恐らくボールの速力の如何に因るものであると思ひます。硬球に於きましては、球速が非常に早いので、ボールの扱ひが非常にデリケートであり、難しいのでありますが、デリケートであり、且つ難しい、それだけに興味が多いのであります。況して軟球は日本だけのテニスでありますが、硬球は世界的のテニスであります。たゞ單に一國一州を目的としてあるよりも、世界を相手として研究し、練習してこそ、そのものがいよく發達するのでありますから、行詰つた感のある軟球をいつまでも固守することなく、漸次に世界的の硬球に移らんことを望む次

第であります。更にまた一方から考へれば、體軀矮小な日本人が、世界を相手として縦横無盡に活躍し、しかも世界に名を成すを得るものは、このテニスを措いては他に見當りません。幾人の使節を派遣するよりも、一人のデヴィスカップ選手を送つた方が、國際間の友誼を増すと云はれてゐるから、その意味から言つても、私は硬球がますます盛んになつて大選手の出現を望むものであります。このたびの新規定は、軟球をして漸次硬球に近づけんとしたもので、軟球から硬球への風潮を辿るものであります。しかし硬球は、ボールやラケット等の經費が軟球よりも遙に多くかゝりますので、硬球の普及を妨げてゐることは眞に遺憾なことでもあります。軟球は一打二三圓くらゐですのに硬球は一打十八九圓します。しかし和製のボールも、ラケット等も漸次改良せられて、かなりいゝものができるとなりましたから、漸次硬球の使用も盛んになること、信じます。硬球をやりますには、いきなり硬球に入つた方がよいとか、軟球から硬球に移つた方がよいとか、種々議論のあるところではありますが、私は少し軟球をやつて、ボールの性質、球の打ち方などテニスの大體を知つてから、硬球に移ることは總てに於て便宜が多いと思ひます。しかしその軟球時代は、正しいフォームを以て打球し、謂ゆる軟球の打ち方に固まらないやうに、注意すべきであります。軟球の打ち方に固まると、なか／＼のび／＼した姿勢で打てなくなるのであります。なほコートや用具、打球の種類、その他ゲーム上に於ても、軟球と相通じてゐるものもありますから、一

と通りは軟球の項を御参照ください。以下硬球のテニスに就て述べることにいたします。

二、ラケットの選び方

ラケットの善悪は、ゲームをなす際に勢からぬ影響を及ぼし、初心者にとつては技術の習得上達にかなり關係を及ぼすものでありますから、その選擇は輕々に爲すべきものではありません。このラケットの選び方は、軟球に於てもさうであります。硬球に於ては一層大切であります。そのラケットの選び方に就て注意すべきは、第一にラケットの重さです。その人の體力腕力に相當するものを選び、決して重いのはいけません。ひと頃重いの／＼と流行のやうでしたが、必ず無理が起つてきますから、初心者には注意すべく、普通の方なら十四五オンス、婦人の方なら十二三オンスのがいでせう。第二は平均のよくとれてゐるもので、振つてみて重さが一方に偏してゐるのはよくありません。先端や中央或は手許に著しく輕重を感じるのには不適當であります。第三はフレーム（周圍の枠）の木理が粗くてよく通つてゐるものがよく、中途で木理の切れてゐるのは折れ易いのであります。そして木のよく乾いてゐるものを選びます。第四は柄の握り（ハンドル）は丸、菱、いづれでもよいのですが、餘り太過ぎると手頸を痛めることがあり、細過ぎると球

の速力に壓倒されて握りが狂ひ易くなりますから、自分で握りよいものを選びます。しかし大體に於ては、力の無い人は比較的太いハンドルを選ぶ方が安全であります。第五はガットは弾くとカン／＼と音のするくらいに強く張つてあるものを選びます。ガットは赤や青、黄などいろ／＼な色がありますが、その色には關係いたしません。太いのと細いのでは、細い弾力のあるのがよいのですが、初心者練習用には比較的太い丈夫なのがよいでせう。

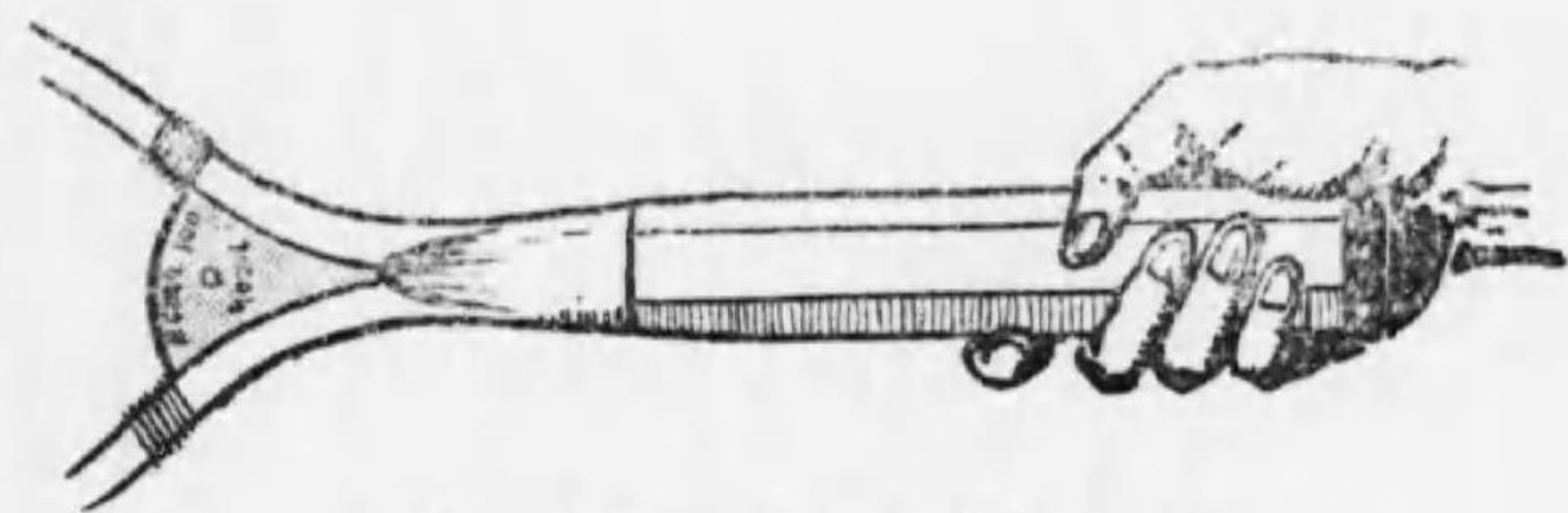
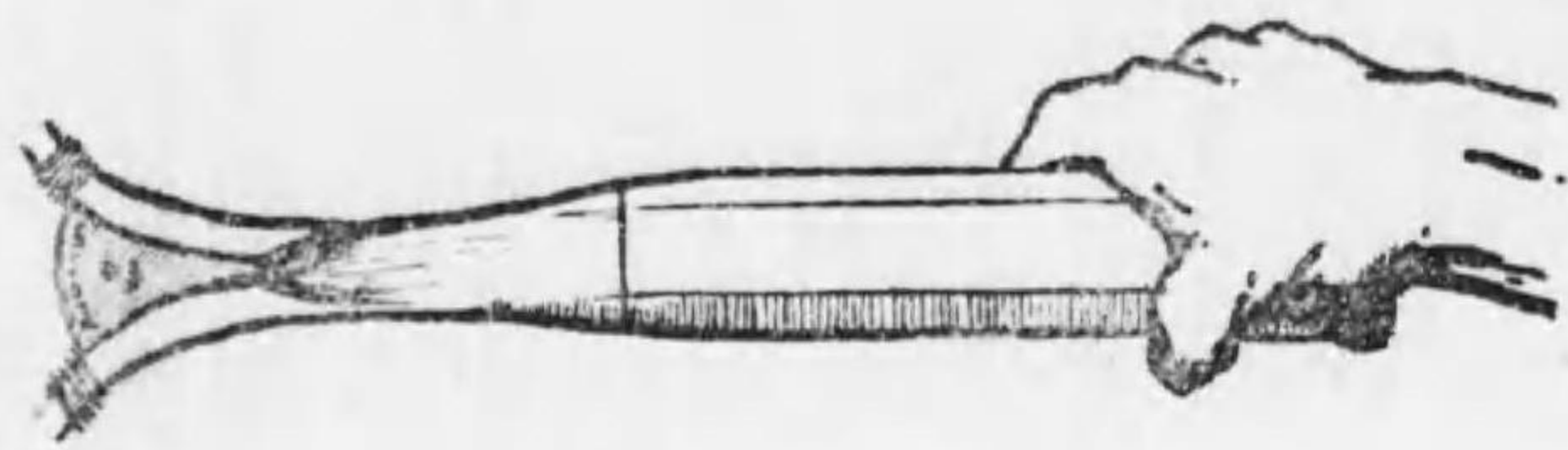
ラケットは常に愛すべきで、雨や霧を防げるは勿論、炎天に曝さぬこと、濕氣を避けること、一寸おくにしても柄の方を下にしておくまでの細心の注意が肝要です。使はないときはカヴァーに入れてプレスを掛け、狂はないやうに注意せねばなりません。ガットを弱める濕氣を防ぐためには、火氣のある天井に吊るしておくとか、新聞紙に包んでおくのがよいのであります。

ラケットは軟球で七八圓からあり、硬球で和製十二三圓、舶來十八九圓から用ひられ、ガットは和製二三圓、舶來五圓くらゐからあります。

三、ラケットの握り方

ラケットの握り方即ちグリップの如何は、打球にかなり關係あるものであります。殊に球速の早い硬球に於ては、このグリップの問題は特に大切であります。勿論善い方法と悪い方法とはありますが、その人の腕の工合、筋肉の加減、打ち方等によつて銘々違ふものでありますから、誰もこのグリップでなければならぬといふことはできません。たゞ一つのグリップが正しくないと斷ずることはできないのであります。各人がまづ自分に適した、自分のグリップを以て更に研究して行くべきものであります。

このグリップには、軟球のところでも述べましたやうに、大體横持と縦持に區別することが出来ます。横持はラケットを握つてその儘手を伸ばせば、ラケット面と地面とが平行する握り方、縦持はラケットを握つた手をその儘伸ばせばラケット面と地面とが垂直になる握り方です。軟球ではボールの性質上、ドライブの打ち方が適當してゐますので横持がよいとされてをりますが、硬球ではボールの速力の如何が、勝敗に非常に影響します。近來は、このボールの速力といふことが、極めて重要視せられるに至りました。従つて速力のあるボールを打つには、ボールに餘り廻轉を與へないスライスの打ち方が理想とされてをります。そしてこのスライスの打ち方をなすには縦持が適當してをります。ゆゑに初心者縦持によつて打法を研究したがよいと思ひます。しかしプレーヤーは種々異つた位置及び方法でボールを打たねばなりませんので、縦持なら縦持、たゞ一つのグリップに固着するは非常によくないこと、思ひます。フォアでもバックでもヴォレーでも



ブリッジのトックラ……圖二十第

(ブリッジのドンハグリップは圖下ドンハーフは圖上)

グリップを變へないで正確に打てるならば、球速を尊び、従つて瞬時を争ふ硬球の打法としては、誰もが切望するところのものでありますが、かゝるグリップは現在不可能のことでもありますから、それ／＼のストロークによつて、どうしても少しづつグリップを變へねばなりません。フォアのグリップを縦持としますと、バックを打つときは、そのグリップをその儘に少しずらすのです。これはフォアのグリップの儘でバックを打つとしますと、ラケット面は下方を向いて、ボールをラケット面で垂直に打つことができなからであります。

右の如くで、ストロークに際してはラケットのグリップは千變萬化であると言ふべきでありまして、横持、縦持といふやうなことは、ほんの筋道を示した

に過ぎませんので、その應用は各人がそれ／＼に研究すべきものであると思ひます。なほラケットのどの邊を持つべきかも大切なことで、軟球のところでも述べましたやうに、柄の中程を持つのと、後端を持つのと、尻革を掌中に入れて持つのと、ストロークによつて少しの利害得失はありますけれども、大體に於きましては、柄の後端、なるべく尻革を掌中に入れて握る握り方が、一番強いボールを打つに適してゐるものと思ひます。

四、上達する練習の順序

初心者がラケットを握つて、初めに何を練習するかといふことは一番當面の問題であります。そして正しい順序によつて練習することは、テニスに早く上達する所以であります。然らば如何なる打球の順序によつて練習するのが一番よいかと申しますと、初めにグラウンド・ストローク、次にロッピング、それからヴォレーの順に學ぶべきであると思ひます。

グラウンド・ストロークは、ストロークの基礎ともいふべきでありますから、このストロークを充分正確に習得し、基礎を完全にせねばなりません。このグラウンド・ストロークは最初は正しくコートに入れるため

に軟かく打ち、常に相手のコート深く入れることを心懸けます。そして自分の思ふ方向に自由に打てるやうに、打つ際に方向を考へて打つやうにせねばなりません。初めはフォアハンド・ストロークを、次にバックハンド・ストロークを完成いたします。

フォアハンド、バックハンドとも自由に打てるやうになりましたら、こんどはロッピングの練習にかゝります。初めは高いロッピングの練習をし、次には前進した相手の頭を越すくらのロッピングの練習をします。ヴォレーは攻撃に於ける恐るべき武器であります。それだけこれを會得するのは、難しいものであります。から、グラウンド・ストロークの正しいフォームができ、相當これに熟達した後に始めるべきで、グラウンド・ストロークの會得されない中は、なるべく避けねばならぬと思ひます。ヴォレーを練習するに至つては、いつヴォレーすべきかとヴォレーする位置及びその前進法などに就て研究すべきであります。またサーブは常に練習をすべく、一人でもサーブの練習はできるのであります。

なほ初心の方は打球に際して常にボールを強く打つのであります。初めのうちはラケットの中央でボールを正確に中てるやうにすべきであります。強く打つことは自然にできるものであります。また初心者は、バックが打ち難いものですから、バックの球でも、これを打ち易いフォアに直して打球するものであります。が、それではいつまで経つてもバックに上達することはできませんから、フォア、バックともに打つやうに

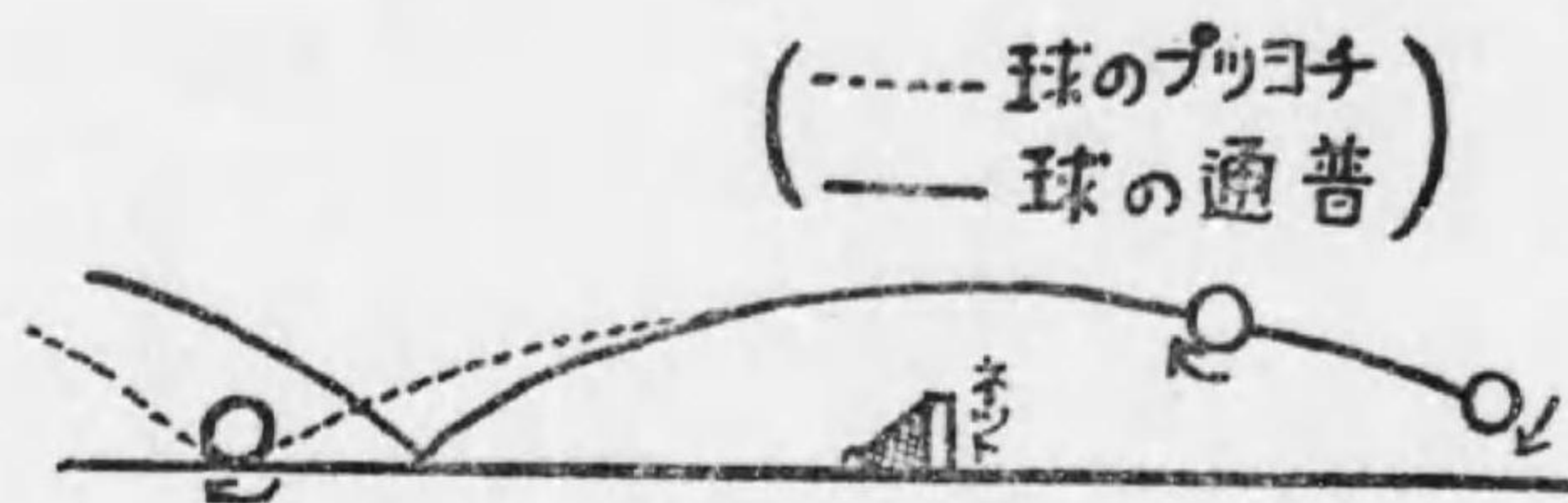
せねばなりません。

また一人だけの練習法としては、戸や壁に向つて打球するのも、球のパウンドの加減を知ることができ、また眼の訓練にもなりますので、謂ゆる壁打ちの法も有効な練習法の一であります。

五、球の廻轉とその處理法

ストロークによるボールの廻轉に就て知ることとは、テニス技の根本であり、打たれたボールの性質やパウンドの如何を知ることができ、そしてストロークをより有効にするために、極めて大切なことでもあります。から、各種の打法によるボールの廻轉及びそれに對する打法等に就て、少しく述べることにいたします。

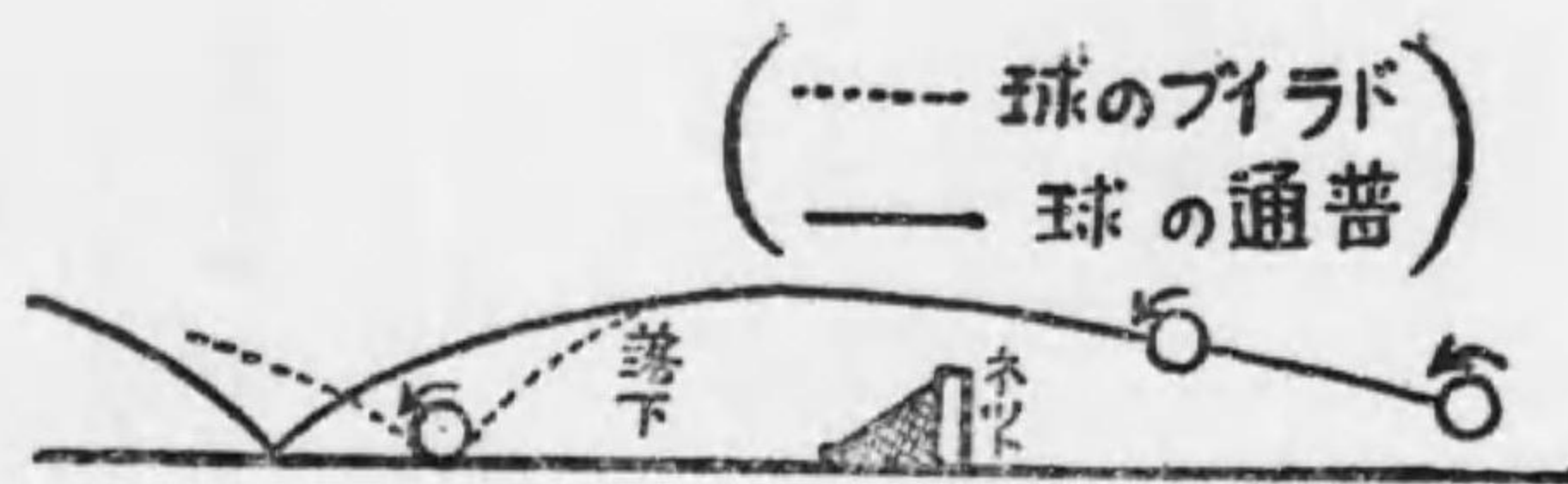
(一) スライスのボール……この打ち方はボールをラケット面と垂直になるやうに打ちますので、ボールは餘り自轉することなく飛んで行くのであります。従つてボールの自轉によつて受ける飛行中の抵抗を受けることが少いので、ボールは與へられただけの速力を以て飛んで行きます。従つてこの打ち方は、最も球速あるボールを打つことができます。しかしそれだけアウトする危険があります。このボールは球速がありますので、強く打たれたボールはたゞ中で氣味でも、かなり強く返つて行くのであります。



方め進の球のプツヨチ……圖四十第

返すことは、その性質上困難であります。ドライブの球のパウンドは大きく高いのでありますから、ベース・ラインの後方に位置するを要します。

(三) チョップのボール……チョップ・ストロークによつて打たれたボールは、ドライブとは反対の飛び方をして、ラケットを離れると常に上方に向はうとし、その球はいつまでも遠くに飛んで行きます。ゆゑに普通の球よりは後方に落下します。また球に與へられた廻轉の性質によつて、その速力もドライブほど速くありませんので、ネット・プレーヤーには有効な打法ではありません。しかしこのチップの球は、地上に落ちた瞬間に一時止まつて、パウンドは小さいばかりでなく、そのパウンドは既に大半力が脱けて、これをドライブするには適當なパウンドではありませんので、ドライブを以て打つことは不適當であります。よしドライブを以て打つとしても、この球はラケットに中ると下方に向く性質がありますので、普通よりも上方に打ち上げねばなりません。殊に、これをバックハンドで打つことは困難でありますので、バックコート・プレーヤーにはこのストロークは有効であります。しかしヴォレーの巧妙なネット・プレーヤーには、前に申しましたや



方め進の球のワイラド……圖三十第

(二) ドライブのボール……ドライブのボールにはそのストロークによつて二つの特性が與へられます。その一つは打球によつてボールが前方に進出する力であり、他の一つは球自身を右廻轉即ち右より左に廻轉せしむる力とあります。従つて球がラケットを離れてから最初の内は、進出力が強いため、廻轉の性質は全く征服せられて球は急速力を以て前方に飛んで行きますが、その後半に於ては進出力が弱り廻轉の特性が現れて、廻轉による飛行中の抵抗を受けて、普通のボールよりも急激に落下します。ですからネット・プレーヤーに取つては頗る扱ひ難いボールであります。即ちラケットを離れてネットを越すまでは球速が早いのでネット・プレーヤーに取つて餘裕なく、ネットを越えたと急激に落下し始めますので、球の見分けが困難で、かつ低いところで打たねばなりませんので、攻勢に出ることが困難となるのであります。ですからこのドライブはネット・プレーヤーに對する打法として有効であります。しかしネットを越した以後の球速は次第に遅くなり、パウンドも大きいのでバックコート・プレーヤーに對しては効力がないのであります。このドライブにはドライブを以て對するのが一番よく、ヴォレーやチョップで

うにこの打法は不利であります。チョップにはチョップのストロークを以て對するのが一番よいのであります。

(四) 球速を増すに就て……ボールに一層速力を附けるに就て利用すべきことは、ストロークに際して手頭の働きを加味すれば、幾分速力を増すことができるのであります。即ち打球の瞬間に手頭でラケットを押すやうにしますと、球速を増すと共に伸びる傾きがあるのです。チョップやヴォレーなどは、手頭を働かして幾分引き氣味にしますと、ボールをして、一層その特性を發揮させることができます。しかしこれを行ひますのには、細心の研究を要します。

六、ストロークス

(一) グラウンド・ストローク

ボールは打ち方によつてグラウンド・ストローク、ヴォレーに二大別され、またボールをとる體の位置によつてフォアハンド・ストローク、バックハンド・ストロークに分たれてをります。このいづれのストロークもみな大切であります。その中でもグラウンド・ストロークは、打球の大部分であるといつてもよいから

で、ヴォレーを主とするネット・プレーヤーも、全體の打球の五割以上は、このグラウンド・ストロークにより、バック・コートにあつて打ち合ひを好むプレーヤーにあつては、約九割までは、このストロークによつて、勝敗を決するほどに重要な打ち方であります。

このグラウンド・ストロークは、ドライブ、チョップいづれの打法によつても打ち得るものであります。大體の原則としては、ボールが膝と胸との間の高さにあるときに打つに適當してをります。そしてボールのバウンドが餘り高ければ、適當の高さのところまで打てる位置まで後退します。そしてフォア、バックともそれぞれ足の構へを充分にし、ラケットを思ひきり後方に引いて、ボールをラケット面と直角をなすやうに強く打つのです。この打球の際は、如何なる場合に於てもボールを身體の正面で打つことなく、必ずフォアかバックかのいづれかにして打たねばなりません。

このグラウンド・ストロークはヴォレーに比して、球を深いところに送るを要しますので、打球に際しては身體を充分自由にし、ラケットの引き方、振り方並びに重心の移動も、他の打球に比して大きく、かつ速かに爲さるべきであります。

立派な完全なストロークをなさうとするには、次の要點に注意せねばなりません。

一、眼をいつも球より離さぬこと。

- 二、スタートをより早くすること。
 - 三、足の開き方動き方に注意すること。
 - 四、ラケットの中央で打つこと。
 - 五、特殊のストロークの外ラケットはなるべくボールと直角に中てること。
 - 六、打つ瞬間にグリップをしつかりすること。
 - 七、ラケットの引き方振り方を充分にすること。
 - 八、重心の移動を完全にすること。
 - 九、打つたラケットは自然に軽く振ること。
 - 十、打つた後は直ぐ次のモーションを起すこと。
- 等であります。更にアウトしてもネットしないやうに、なるだけ深い球を打つやうに心懸け、自分の弱點を掩護のみしてはならぬことなどがあります。なほ「打球による打ち方の名稱」、「大切な眼と足の注意」などを、特に御参照ください。

(二) フォアハンド・ストローク

フォアハンド・ストロークをなすときは、左足を前に二尺ほど踏ん張り、體はネットに對して横向きになります。即ち左肩はネットに向はねばなりません。そして腰を下して(曲げるではありません)思ひきりラケットを後方に引きます。そして弾みをつけて、ボールのなるだけ高いバウンドのところを、ラケットの中央で打つのです。そのときラケット面とボールとは直角をなすやうに打ちます。打つ瞬間は右足にありました重心が自然に左足に移り、重心の移動を完全にします。ストロークの際に完全に重心が移動すれば、ボールに一層速度が加はるのでありますから、足の開き方と共に、この重心の移動を完全にするやう練習すべきであります。そしてストローク後のラケットは軽く前方に振られて行きます。打つ際グリップをグッと固くしないと、早いボールに押されますから、この注意が肝心です。殊に軟球から硬球に入った當座とか初心者の方は、一番これを忘れ易いのであります。ボールを打つべきところは、ラケットを充分伸して、ボールがラケットの面の中央で、直角に當る邊が最上のところであります。また球の高下に就ては、場合によつて多少違ふのでありますから、いち／＼述べることはできませんが、なるべく高いところでボールをとることが、相手方コートに入る率が多いのでありますから、低いところをとるよりも、なるべく高いところでボールを打つのがよいのであります。

(三) バックハンド・ストローク

バックハンド・ストロークは誰もが至難とするところですが、練習次第でフォアより正確に機械的に打てるやうになります。グリップはフォアのグリップを少し右にずらしします。足の構へはフォアハンドのときと反対で、右足を前に出し、身體を充分横に向けます。この體の位置を正しくするといふことは、バックのときは殊に大切であります。身體の位置が正しくできてをればボールを打つ際に無理がなく、重心の移動を完全にすることができまますので、強い球でも楽に受け返すことができるのであります。足の開き方はフォアの時よりも少し狭くします。これも餘り開きますと、重心の移動が完全にできないからです。そして左肩上まで持つて来たラケットを、その儘押し氣味に、丁度刀を鞘から拂ふときのやうに、思ひきり強く前方に振るのです。その際ボールは後方よりも少し前方でとるやうにし、自分の力が充分ボールに加へられるやうにします。ボールが低ければ低いだけ腰を下し、多くの場合に於て、ラケットの頭は手頸の高さと同じ高さを保つやうに心懸けることもまた大切であります。そして振られたラケット面は、多く地面と對するやうになることも注意すべきであります。

このストロークは研究と練習と忍耐とを要することが極めて大でありますから、大いに努力しなければなら

りません。總ての球をフォアに廻して打つことは排斥すべきことで、これはバックに上達した人にも有効な方法であります。

(四) ドライヴ

硬球に於きましては、球速を重要とせられ、従つてなるだけ球に廻轉を與へない、即ちラケット面を球と

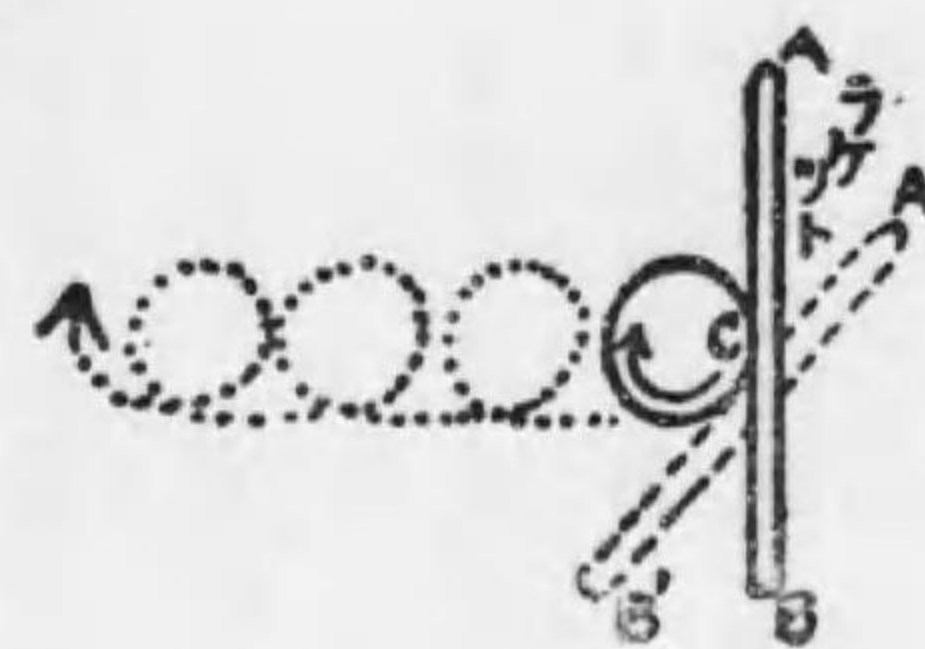


第 五 十 圖... ドライヴのガイド方

直角に中てるスライスの打ち方がよいとされてをりますけれども、いつもこの打ち方ばかりによることはできません。球に廻轉を與へるドライヴの打ち方はまた最近の庭球技術に於きまして重要缺くべからざるものとなつてをります。このドライヴができないで、ネット・プレーを爲すことは常に困難を感じると共に、またドライヴを持たないでネット・プレーヤーに對することは、極めて不利なことであります。このドライヴの打ち方はどうすればよいかと申しますと、日本の軟球に行はれるものがそれでありませす。即ちラケットを後方より前方に向ひ稍上方に振り、球の後面から上面に擦り上げ、球を前方に廻轉せしむる打法であります。圖に就て示せば、ラケットP Oをボールの後面から上面に擦り上げますので、ラケットはP Oのところをいたり、ボールは

Aより矢の方向に廻轉を續けて、前方へ飛んで行くのであります。このドライブを打つに際しての球のとり方、身體の位置、足の構へ方、ラケットの引き方、重心の移動に注意することなどは、フォアハンド・ストローク、バックハンド・ストロークのときと同様であります。

(五) チョップ・ストローク



第六十圖…チヨップの打ち方

チョップはまたカットといふ一般的名稱の下に含まれます。このストロークはラケットが球に中つた瞬間に、ボールを上方から下方へ擦り下げて、ボールにドライブとは反對に、時計の針と同じ廻轉を與へる打ち方であります。圖に就て示せば、ラケットABをボールのC點にて接觸するとき、ラケットをA'B'のやうに擦り下げますので、ボールはCより矢のやうな廻轉を續けて飛んで行きます。このストロークはラケットを後方に引く必要もなく、モーションも小さく、比較的身體に接近したところで打つことができます。またこのチョップは高いバウンドに對して最も有効で、殊に相手のバック深く打ち込むときには、それを返すのに非常な困難を感じるのであります。この打法は一般的の打ち方として推奨することはできませんが、相手によつて時々

この打ち方によることも妙味あることであります。

七、ヴォレーの打ち方

(一) ヴォレーに就て

ヴォレーは、球がまだ地面に落下しないうちに打つ打法であります。従つてこのヴォレーは、どうしてもネット近くにあつて打たねばなりません。このネット近くに位置する結果としては、バック・コートはかなり空きますので、自分のコートを完全に守るには最も不利な位置であります。即ち左右を抜かれるか、頂上を越す球に對して防禦の備へをせねばなりません。斯る不利な位置にありながら、なほこのヴォレーがその效用を認められるのは、ヴォレーが全然攻撃的の打法であるからであります。ゆゑにこのヴォレーは、相手に餘裕を與へないやうに短い球であり、そして急角度の球であることを要します。ヴォレーの原則として、特殊の場合のほかは、球を上方より下方へ、若しくは水平に打たねばなりません。そのヴォレーすべき位置は、ネットに近いほどよいのであります。頭上を越すロビングにも備へる必要上、ネットより十尺乃至十二尺の邊

に位することが一番よいとされてゐます。

このヴォレーを大別して、頭より上のヴォレー、頭より下のヴォレーとなりませんが、私は更にこれを分けて普通のヴォレー、ロウ・ヴォレー、ストップ・ヴォレー、スマッシングに分けて述べることにいたします。

(二) 普通のヴォレー

普通のヴォレーと言はれるものは、頭より下、乳邊のところまで打つヴォレーであります。このヴォレーの構へ方は、フォアハンド、バックハンドともに、グラウンド・ストロークの場合と異りません。たゞグラウンド・ストロークのときよりも足の開き方を狭くし、全體のラケットの振り方を小さくします。従つてこのヴォレー・ストロークは、上腕（肘より肩までの部分）を多く用ひないやうにし、前腕（手首より肘までの部分）にてラケットを振るやうにいたします。この振り方は、總てのヴォレー・ストロークをなすに際して注意すべきこととあります。そしてラケットは、ボールと直角に中てるやうにするのが一番よいのであります。特に速い球に對してはさうであります。左斜の方向にヴォレーしようとするには、球を少し前方にて取り、右斜の方向にヴォレーしようとするには幾分後方にて球をとる氣味にいたします。球を強く打たなくても、重心の移動を完全にすれば球に速力が加はつて、決定的なヴォレーをすることができるのでありますから、重心の移動はこのヴォレー・ストロークにも大切であります。

(三) ロウ・ヴォレー

ロウ・ヴォレーは乳邊より下でするヴォレーであります。このヴォレーをなすに方つて注意すべきことは、身體の構へ方であり、低い球をとるのでありますから、兩足の開きを大きくし、なるべく腰を下し、眼を球の高さと平行に近づかしめ、球をかいこむやうにして、ラケットを前方にさし出します。このときはやはり上腕は動かさず、下腕を以てスウィングするやうにします。バック、フォアとも同じ要領です。このラケットを當てる時、ラケットの先はなるだけ地面に下げぬやうに、ラケットの柄と先とは水平になるやうにし、ラケット面は地面と斜に向ふ筈です。當てる際手頭を働かすと、ボールは勢よく反撥して行きます。

(四) ストップ・ヴォレー

各種のヴォレーに於て、打たれた球の反撥力を弱め、球勢を殺ぎ、ネットを越して小さくネット際に落すヴォレーの一種の打法をストップ・ヴォレーと言ひます。この打法はフォアハンド、バックハンドとも従來のヴォレーの構へ方で、たゞラケットの握りを心持ち緩くし、手頭だけでラケットを球に當てるやうにします。腕で

打つのではなくして、球を一度ラケットに當て、そしてそのラケットを幾分引き氣味にするのです。このストロークに於ては決して腕を振ることなく、かつネット際二間以内のところにて行ふべきものであることを注意せねばなりません。

(五) ハーフ・ヴォレー

なほヴォレーの一種の如く思はれるものにハーフ・ヴォレー（ショート・バウンド）といふのがありますが、このストロークはヴォレーよりはむしろグラウンド・ストロークの一部とした方が適當であるかも知れません。この打ち方は球がバウンドしようとするときに、ラケットを球と垂直になるやうにさし出せばよいのです。尤も強い球速のボールはバウンドが低いのですから垂直より稍上方に向け、速力の緩いボールはバウンドが高いためです。ラケット面を下方にして當てるやうにいたします。この打法はほんの間に合せの打法でありますから、止むを得ない場合のほかは、なるべくこの打法をしないやうに注意せねばなりません。

(六) スマッシング

スマッシングは頭より上のヴォレーに含まれるものでありますが、スマッシング本来の意味は、強く打ち下すといふことを必要條件といたしてをりますから、たゞ軽く受けただけではスマッシングとは言はれません。その打ち方は上半身を反り身にし、初め重心を後足に託し、球が左眼斜前方で、腕を伸ばしラケットの中央で打つるところに落下して来たところを思ひきり強く打ち下します。と同時に重心は左足に移ります。足の構へは大體グラウンド・ストロークの要領で、その開き方は餘り多きくしては力が充分入らないのでいけません。そして後退する場面などは小刻みにせねばなりません。婦人の方はこのスマッシングに於ける後退は、骨盤の關係からどうも早くできないやうであります。小刻みに足を動かせば早く後退ができるのであります。またスマッシングに於ては、よく落下して来る球を見ておますと、確實にスマッシングすることができるのであります。高くロップされた球、即ちフラックボールは、容易にスマッシングができるやうに思はれて、その實一番至難なボールなのです。かゝるボールのスマッシングには特に慎重にせねばなりません。

八、ロップ

ロップは相手の頭上を越して高く打ち上げる打法であります。このロップを爲す場合は、ネット際に前進して来た相手のスマッシングやヴォレーを避けるときとか、或は相手に壓迫されてこつちがたち／＼となつた

とき自分の陣を變へようとするとき、或は相手の攻撃が急で、呼吸が切迫してきたとき打ち合に餘裕を取るためなどに用ひられる防禦の打法であります。また相手がスマッシングやヴォレーなどネット・プレーの上手な人ならば、低いヴォレーを打つて相手を苦しめる攻撃用の打法ともなるのであります。シングルの場合に於ては、このロップを用ひる度数が少いのでありますが、ダブルに於きましては、どちらもネット際に前進してネット・プレーを主にいたしますので、それに備へるために、どうしてもなくてはならぬ武器であります。この打ち方は、足の構へ方、打つ姿勢などは大體グラウンド・ストロークと同じ要領で、ボールを前方比較的高いところできり、ラケットを斜に上方に向け、ボールの後側下面を打つやうにします。その振り方はグラウンド・ストロークのやうに大きくせず小くするのであります。またドライブを掛けてロップするのにもありますが、この打法はなるべくボールの後側下面から擦り上げて、振られた後のラケット面は上方へ向くやうになります。ロップはなるべくベース・ライン近くに深く打つべきで、さうではありませんと、相手にスマッシングやヴォレーされて得點されることになります。

九、サーブ・グイス

(一) サーブ・グイスの心得



方へ構の足……圖七十第
(スィ・ヴァーサ・スイラス)

- サーブ・グイスは攻撃の第一球でありますから、これを爲すにはその目的を達するやうな打ち方をせねばなりません。たゞ徒らにサーブ・グイスをすることは、身體を疲労させるばかりでなく、相手に乗ぜられることになるのでありますから、サーブ・グイスを爲すに方つて、次のことを心得ねばなりません。
- (一) 眼を球に注ぐこと……球を入れようとするコートを眺めるよりも、まづ打たうとする球を見ること。
 - (二) 無意識にサーブするな……相手の長所短所、コート内の位置などを注意して、サーブするやうにすべきであります。
 - (三) 足の開きに注意せよ……強く打つためには、正

しい足の開きをせねばなりません。

- (四) 正確にサーブせよ……ファースト・サーブが馬鹿に強く、セコンド・サーブが馬鹿に弱いやうではいけません。兩サーブとも餘り變らない程度のもので、正確に入れることが大事であります。
- (五) ダブル・フォールトを餘り怖れるな……ダブルことは悪いことではあるが、怖けついでサーブするよりも、大膽にやる方がよいのです。大膽の基礎となる自信は、練習によつて得る外はありません。
- (六) フット・フォールトを注意せよ……大部分のフット・フォールトは不注意から爲されるものであります。
- (七) 深い球を打て……ネットするやうな短い球よりも、初めはフォールトしても、深い球を打つやうにした方がよいのです。
- (八) 一つの完全なサーブを得よ……よい一つの完全なサーブを得るまでは、餘りカットやツウィストを避ける方がよいのであります。
- (九) ブレースはこの後に……強く自由にサーブできるやうになつてから、相手の隙を狙ふやうにします。
- (十) 少くとも二種以上のサーブを……相手やその日の状態によつて變へて對することのできるやうに二種以上のサーブを持つてゐることを良策とします。

(二) サーブの種類の打ち方

サーブはいろいろありますけれども、大體に於て次の四種類が多く用ひられてをります。

スライス・サーブ 足の構へは、兩足の爪先を結ぶ線が、ベース・ラインと稍斜になるやうに横向きになり、球を高く擧げ、ラケットの中央で強く打つて落とすところ

に落下して来たとき、球の面を右から左下に擦るやうに前方へ打つのであります。たゞこの際に、球をカットしないやうに注意すべきであります。このサーブは最もやさしく、球速もありカーブもし威力がありますので、初心者には最も適當なものであります。

アメリカン・サーブ 球の打ちどころや姿勢は

スライス・サーブと同様です。たゞ球を比較的左方に上げ球の後上面から右側面に打つやうにし、ラケットを左方から右方に、かつ稍前方に手頭を利かせて打



方へ構の足……圖八十第
(ス、イ、サー、サ、ン、カ、リ、メ、ア)

つのであります。このサーブの速力は概して緩いのですけれども、飛んで行くときは左にカーブし、かつ急激にドロップして、バウンドは高く、バウンドしてからは右方に(相手のバック)カーブします。多くの米

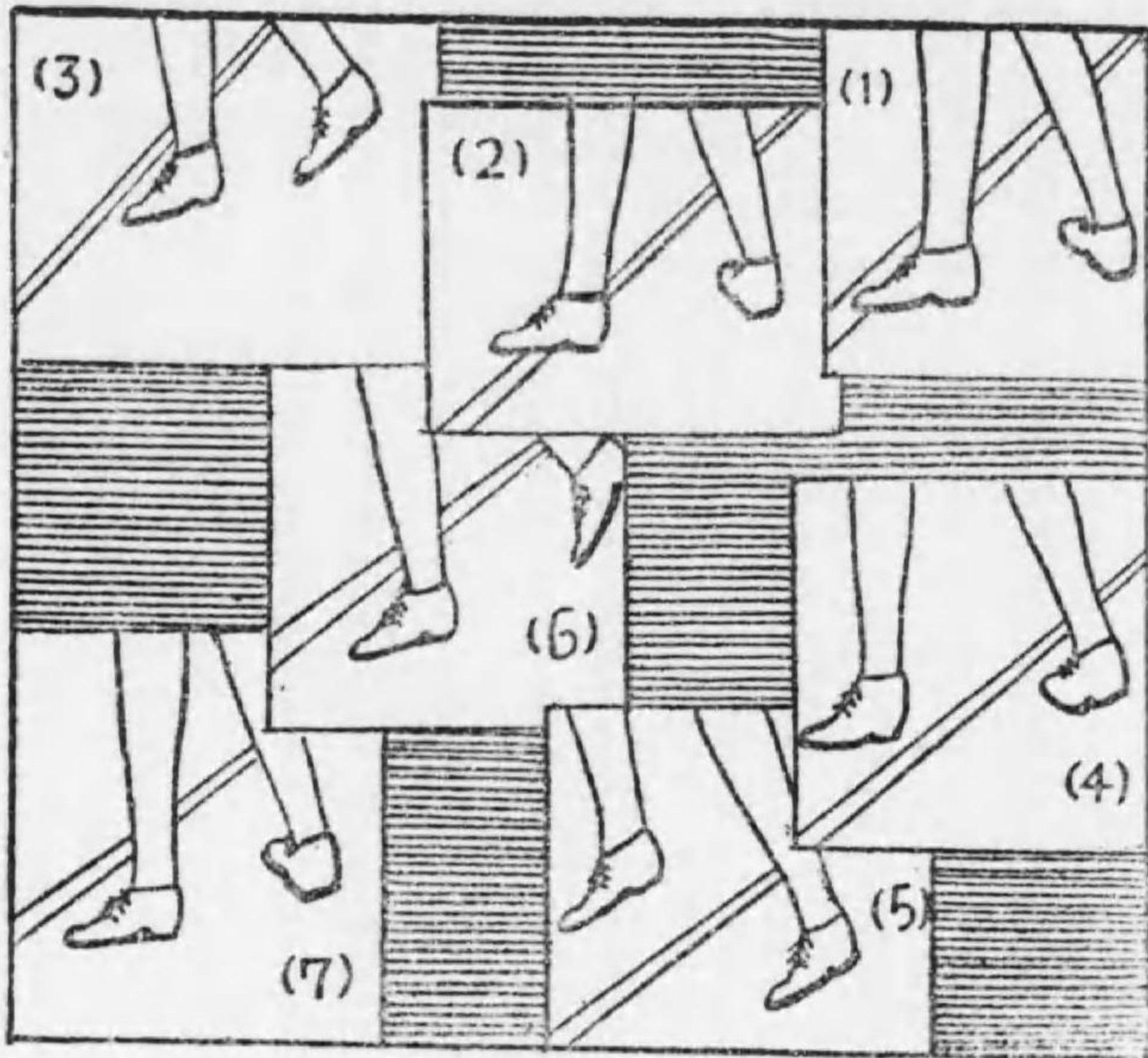
國のプレーヤーは、この打法によつてをります。

レバース・サーブ このサーブは前二者と異りラケットを横持にし兩足を揃へてネットに直面して立ち、ボールを頭の前方に比較的高く上げ、ラケットを右から左に打ち振り、ラケットの面は球の飛んで行く方向に向いてゐなければなりません。即ちボールの後面から内側面へと打つのであります。この球は普通左から右の方にカーブし、バウンドは高く、かつ急角度に左の方に曲りますが、このサーブは球速もなく、不正確で、かつ身體のモーションが逆になるなど、有効なサーブではありません。

フラット・サーブ このサーブの足や姿勢は、スライスの打ち方と同じであります。たゞボールに廻轉を與へないやうに、ラケット面を球に真直ぐに當て、打つのです。廻轉が無いので球速がありますけれども、入る率は非常に少いのであります。身長のある人には、このサーブも有利なものであります。以上の中で普通に行はれてゐるサーブは、スライス・サーブとアメリカン・サーブとであります。初心者の方や婦人の方には、スライス・サーブから始めるのが一番よい方法であると思ひます。

(三) フット・フォールト

フット・フォールトは、サーブの姿勢に關する一般的规定で、サーブの際にこの姿勢に關する一般的规定



トルーフ・トップ……圖九十第

すでカーフ・トップいし正は(7)(6)トルーフ・トップは(5)らか(1)

の規定即ち第六條に違反した場合を言ひます。テニスのゲームに於て、このフット・フォールトの問題は重要な事項の一であります。多くのプレーヤーはこのことに關し不斷的注意と充分な用意とを持たないやうであります。正式の競技會に於ては、このフット・フォールトはやかましいのでありますから、初めから充分の注意を以てサーブの練習をなすべきであります。嚴格に言へばかなりむづかしいのであります。規則第六條に違反する最も明白な例を挙げますと次の如き場合であります。

一、ベース・ラインを足で踏んでサーブする場合。

- 二、ベース・ラインに足が一寸でも觸れた場合。
 - 三、飛上つてサーヴした場合。
 - 四、駈けながらサーヴした場合。
 - 五、歩みながらサーヴした場合。
 - 六、ラインを踏まなくとも揚げた足がコート内に入つた場合。
 - 七、踏へた位置を小刻みに移動する場合。
- 大體右の如き規定でありますから、サーヴする際に、なるべくベース・ラインより離れて、片足をしつかり地上につけてサーヴすれば、この規定に反することを免れるのであります。

一〇、ゲームの仕方とカウント

軟球はいまのところダブルの試合だけですが、硬球ではダブルとシングルの試合が行はれます。ダブルは二人が一組となつて一組宛戦ふもので、シングルは一人宛戦ふのであります。また男女で組んで戦ふミック・ス・ダブルもあります。試合は初めサーヴィスに始まり、そのボールを受け返し（レシーヴする）、打ち合ひとなつて規則によつて得點するか、失點するかによつて勝負が定まります。一ゲームの勝者は先に四點を得た方で（双方三點宛のときは一方が以後續けて二點得點した方が勝です。一方が二點續けて得點しなければ試合は何度でも續きます）このゲームを早く（五―五のときは前と同じ）取れば一セットとなります。男子の試合は五セット・マッチですから、早く二セットを取ればその試合の勝者となり、女子の試合は三セット・マッチですから、早く二セットを取ればよいのです。

いま一ゲームの點即ちポイントの取り方を言ひますと、次の如くサーヴ側から得點を算へてゆきます。

サーヴァー一點を得たとき	ファイフティーン・ラヴ (Fifteen love)
レシーヴァー一點を得たとき	ラヴ・ファイフティーン (Love fifteen)
双方一點宛のとき	ファイフティーン・オール (Fifteen all)
サーヴァー二點他が零のとき	サーティ・ラヴ (Thirty love)
レシーヴァー二點他が零のとき	ラヴ・サーティ (Love thirty)
双方一點宛のとき	サーティ・オール (Thirty all)
サーヴァーが三點他が零のとき	フォーティ・ラヴ (Forty love)
レシーヴァーが三點他が零のとき	ラヴ・フォーティ (Love forty)

サーヴァーが三點他が一點のとき フォーティ・ファイブ (Forty fifteen)
レシーヴァーが三點他が一點のとき ファイブ・フォーティ (Fifteen forty)
サーヴァーが三點他が二點のとき フォーティ・サーティ (Forty thirty)
レシーヴァーが三點他が二點のとき サーティ・フォーティ (Thirty forty)
双方三點宛のとき ギユース (Duce)

ギユース後サーヴァー得點せしとき (アド)ヴァンテージ・サーヴァー (advantage server)
ギユース後レシーヴァー得點せしとき (アド)ヴァンテージ・レシーヴァー (advantage Receiver)

即ち一點取ればファイブ (十五) 二點取ればサーティ (三十) 三點取ればフォーティ (四十) フォーティ・オールがギユースとなり、ギユース後サーヴァーが勝つには、一點取つてヴァンテージ・サーヴァーとなり、更に一點取つて、そのゲームを得ることになるのです。

新聞などにA嬢六―三、七―九、四―六B嬢とあれば、初めのセットはA嬢が六對三で勝ち、次の二セット、三セットはB嬢が九對七、六對四の記録で勝ち、その試合はB嬢が勝つたことを示すのであります。

一、シングルの心得

シングル・ゲームは一人と一人との戦ひなので、自由に自分の腕を揮ふことができるのであります。このゲームには、努めてネット際に前進してヴォレーしようとするのと、主としてベース・ライン附近でプレーするのとの二つに大體分けることができます。しかし一般のゲーム法としては、常にバック・コートに退つて打ち合ひ、機を見て前進するのが一番安全な方法であります。従つてグラウンド・ストロークが正確でなければなりません。まづサーヴする位置から言へば、左右のコートを最も等分に掩護する意味から、なるべくセンター・マークに接近してサーヴするやうにいたします。そして相手の弱點を衝き、貧弱なサーヴで逆襲されないやうにし、打ち合になつたら深いドライブの強球を、相手の弱所に送つたり、ブレースしたり、左右のコートに送つて相手をして奔勞せしめたり、短い球をネット際に落して相手を誘ひ出し、次で深い球でブレースしたり、機を見て前進しネット・プレーによつて得點するやうに、自由な打球と頭腦の働きを以て、千變萬化の戦ひをなすのであります。このシングル・ゲームに於ては始終變化ある球を打つことが大切であり、また徒らに走つて精力を浪費することは、最後の勝利を逃すことになりまますから、一球一打をも慎

重にいたさねばなりません。次に述べるシングル・ゲームの一般の心得は大切なものであります。

(一) 送球は主として空所を狙ふこと。かくすれば相手を奔走せしめて有力な送球を阻害するからであります。無論相手の弱所に送ることも大切であります。

(二) 打球したらその部に留まつて、その球の行末を見守つてゐないで、直ちに次の備へを立て、相手の球を迎へるやうにしなければなりません。

(三) 打ち合ひ中は腰を据ゑて固定してゐてはなりません。常に動いてゐるか、直ぐにもスタートできるやうに構へてゐねばなりません。

(四) 變化ある球を送らねばなりません。ベース・ライン・プレーヤーには深い球ばかりを打つことは禁物です。短い球、斜の球など交せて送るやうにすべきです。

(五) 前進する相手にはおちついて對すべきです。狼狽することは失點の因であります。

(六) 一度前進したら必ず得點することを考へねばなりません。無駄な前進は勞力を空費するのみです。

(七) 前進の場合には、球がネットを越さない内に自分の思ふ所まで進んでゐねばなりません。

(八) これでキマッタと思ふ送球でも、次ぎの活動を忘れてはなりません。「備へよ常に」です。

(九) 相手が弱いと思つても調子をおろしてはなりません。

(十) 現に勝ちつゝあるゲームには、自分のゲームのやり方を變へてはなりません。負けてゐるときのみゲームのやり方を變へるのです。

二、ダブル・ゲームの要領

ダブル・ゲームは二人が一組になつてプレーするので、二人が恰かも一人の如くになつて動作しなければなりません。ダブルに於ては、この協同動作が根本なのであります。ですからシングル・ゲームに優秀なプレーヤーが組んだとしても、二人がしつくりと合つてゐなかつたならば、決してその組は強い組ではないのです。そのプレーヤーは一つの組としてプレーしないで、銘々が一人のプレーヤーとしてプレーするからであります。この勝手な動作はダブルに於て最も慎むべきことで、二人のしつくり合つた協同動作によつて、ほんに水も洩さぬ連絡が大切なのであります。

次にこのダブルに於ては、シングルの如くバック・コートの打ち合が主ではなくて、二人ともネット際に前進してヴォレーやスマッシュで戦ふネット・プレーを主とするのであります。従つてダブル・プレーヤーは、ネット・プレーに秀でなければなりません。

大體ダブル・ゲームの戦法が右の如くでありますから、プレーヤーは二人ともなるべく前に位置することを要します。ゆゑにサーヴしてから前進と、この前進する動作が大切になつてきます。まづサーヴィスするや直ぐネット際にダッシして前衛と平行の陣に就きます。この場合前進がのろ／＼してゐますと、相手から足下を突かれてひよろ／＼球を送らねばならぬやうになるのであります。この場合の前進は、先にも述べましたやうにダッシ即ち突進の氣味でなすべきで、いくら早くてもしまつたと言ふことはなく、早ければ早いだけ攻勢に立つことができるのであります。レシーヴァーは、レシーヴする際は二人ともベース・ラインの後方に陣してゐますが、一人がレシーヴすると共にこれも平行して前進し、早くネット際に達し、攻勢の陣を張るやうにするのです。サーヴァーは相手の弱點に正確な球を入れて早く前進しようとするれば、レシーヴァーはその足下に巨弾の如きキアンノン・ボールを打ち込んでその前進を妨げようとするのです。若しまた二人が前進してゐて中央も兩側もブレースする隙が無かつたならば、こんどはロップを擧げてこれに對するのです。ダブルはネット・プレーが重んぜられるだけ、これに備へるロップもまた重要な武器となるのであります。二人が行動する際は、必ず平行陣を張つてゐねばなりません。少しでも軟球の如く雁行陣をとりますと、斜が空きますのでクロスに狙はれるのであります。前進するのも後退するのも、二人が一緒になつてせねばなりません。そしてなるべく二人ともに中央を守るやうにします。このことはネットの一番低いのが中央なので、低いボールでも入り易く、かつ二人ともどつちかにたよらうとする弱點があるから、ブレースしよいのでありませぬ。ですからサイドを抜かれるよりも、中央を抜かれる方が恥辱なのであります。また前にあつては、軟球の前衛の如く横にモーションを起して、パートナーのとるべき球をも、無理をして取るやうなことは慎まねばなりません。さうすることによつて却て自分側の陣を亂し、隙を作ることになるからであります。またダブル・ゲームに就ては、軟球の『前後衛の連絡』の項をも、併せて御覽ください。

一三、試合に就いての注意

テニスは婦人や子供の遊ぶ遊戯であると言はれたこともありました。今日では五セットの試合に於ては五哩も走ると言はれます。に、體力を要するものであります。トゥナメントに出場して氣の張り詰めた試合をしますと、夏などは皮膚面に鹽分が噴き出し、一試合で體量がめつきり減じるなどといふことは、實際私どもの経験するところでありませぬ。ですから試合に出場するプレーヤーなどは、特にその身體の攝生に就て注意せねばなりません。即ち試合前一週間からは、身體の調子を狂はせないやうに、規則的の生活を續け、試合の前日には練習を休む人もありますが、全然休むことなく、軽く二三時間の練習をした方がよい

やうに思ひます。そして夜は充分の安眠をとるやうにせねばなりません。しかし試合を控へた前夜は、興奮して誰も眠れぬものですが、それは既に緊張してある證據なのです。試合などのことを考へずに平氣でやるやうにすることが大切です。前夜に策戦などを更に考へることは愚の骨頂であります。

試合当日は、爽かの心を以て、敵と對するのではなく、友とテニスを樂しむ氣で出場するのであります。さうしたゆつたりした氣分は、即ち相手に呑まれない秘訣であります。しかし試合が開始されたならば、技術を盡し、頭腦を働かせて、ベストを盡すのであります。試合である以上、必ず勝つといふ戦闘精神も必要なのであります。技術と意氣が相合して相手に對すべきであります。技で勝つても氣で負けてはなりません。しかしながら、必ず勝たねばならぬとは言へ、そこには常にスポーツマンシップの麗はしい精神が無くてはなりません。相手の感情を害ふやうなプレー振りや、審判に不服を唱へたり、自分のプレー振りを誇るやうな態度や、觀衆相手のプレー振りなどは最も唾棄すべきものであります。味方のエラーを咎めず、相手の美技を賞讃し、自分の技術を謙遜するだけの用意が無ければなりません。そしてこのテニスによつて、私どもはジュントルマンとして、またリーダーとしての美しい人格を練磨して行きたいと思ふのであります。ゲームの休息中は、汗を拭き、できるならばシャツを着換へ、元氣を回復する砂糖水なり、レモン汁なりを攝れば結構です。水は試合中でも餘り飲まない方がよいのであります。

試合の終つた後は必ずユニフォームを着換へるべきで、飲食物などもなるべく刺戟しないものを攝るやうにします。殊に疲勞が甚だしく食慾の無いときには流動物を攝らねばなりません。かゝるときは胃腸も衰弱してゐるのでありますから、飲食物に就て注意せねばなりません。また疲勞の甚だしいときには、殊に足部に熱を感じるのが例でありますから、かゝる際は軽い按摩をとるか、または脚部に枕をして幾分あげるやうにしておきますと睡眠をとることができるのであります。なほ婦人が注意せねばなりませんことは、生理的の變化があるときは、絶対にテニスをやることを避けることであります。

一四、理想的のテニス服裝

理想的のテニスのユニフォームといへば、まづ輕快にプレーができて、かつ汗が出たときに身體に附かない地質のものであり、そして餘り高價でないものであります。

男子用から申しますと、シャツは長袖を捲り上げるよりも初めから半袖にしてある方がゲームに臨んで便利であります。地質はセル、フランシルク、キャラコなどいろいろありますが、白地の木綿の地質が最もよいのであります。ズボンには羅紗地のものがありますが、羅紗地のものは見榮ばかりで實質上には何等の

利益がないのですから、シャツと同じく白地の厚い木綿の地質かフランシルクなどがよいのであります。

女子用ですと、ワンピースとツーピースとあり、おの／＼一長一短があつて、どれがよいといふことはできませんが、ワンピースの方は、上下一枚ですから軽くて動作が自由であり、汗をかいたときに着換へに便利であります。その缺點を申しますとサーヴィスなどのとき、肩をあげますので、どうしても肩先が亂れるやうです。軽快なので夏向などにはこのワンピースがよいと思ひます。ツーピースは、汗をかいたときに上衣だけを脱いで汗を拭くのに便利でありまた着換へにも便利であり、肩先などの亂れもブレー中に容易に直すことができます。缺點としましてはワンピースに比し幾分重く、従つて夏などには暑いやうであります。またセーラー型のものもありますが、あの襟が風やブレーによつて頭までもかぶさり、ブレーの邪魔になりますからセーラー型は感心できません。ワンピースのバンドを附けることや、スカートの際の多少等は動作に邪魔にならない程度でいろ／＼工夫して結構です。その布地としてはセル、富士絹、アルバカ、フランシルク、キャラコなどありますが、實用向のものとしてはキャラコのものかフランシルクをお勧めいたします。また汗止めや亂れ毛止め用の頭髮バンドがありますが、あれも細い黒地の華美でないものを使用したいと思ひます。總て服装は華美に流れず、見せるための服装ではなく、運動するための服装であることを忘れてはなりません。そして一度汗をかいたら、休息中に必ず着換へることに注意すべきであります。

靴はなるべく軽い、踵のない薄いゴム底のもので、従つて底の柔軟なものがよいのです。靴下は動作からいへば、なるべく薄いものがよいのですが、コートの固い面のものとか、或は眞夏などには、足を痛めないために、また地熱を導き疲労を早く感じないやうに、厚目のものを用ふべきであります。

硬球の規則

(本規則は一九二二年十二月倫敦の國際協會會で決定され、爾後多少の修正を加へられ現在行はれてゐるものであります。)

第一條 シンガル・コートは長さ七十八呎幅二十七呎の矩形にして、左右兩側のポストの頂端に固着せるネットにて中央より二分す。ポストの位置は兩側ともコート外三呎あるを要す。ネットの高さは常にポストのところにて三呎六吋中央のところにて三呎あるを要す。この高さを保持するため中央部を幅二吋を越えざるセンター・ストラップにて堅く締める。ネットは上部一帯を幅二吋以上二吋半以内の縁を有するものとす。いまコートの區劃及びラインの名稱を圖解すれば次の如し。センター・マークはベース・ラインの中央とし長さを四吋とす。總ての他のラインは、幅一吋以上二吋を越ゆるを得ず。但しベース・ラインは幅四吋ありても差支へなし。そして總ての寸法はラインの外側にて計るものとす。

(注意) 國際的試合の際にはベース・ライン後方の空地は二十一呎以上、サイド・ラインの方は十二呎以

上あるを要す。

第二條 コートの常備物とはネット、ポスト、コード、ストラップ、バンドのみならず、後方及び側面の圍ひ、固定または移動スタンド、

コート周囲の椅子竝に審

判臺、フット・フォールト審

判席、ラインスマン席を

も含む。

第三條 ボールの寸法は直

徑二吋半乃至二吋八分の

五、重さは二オンス乃至

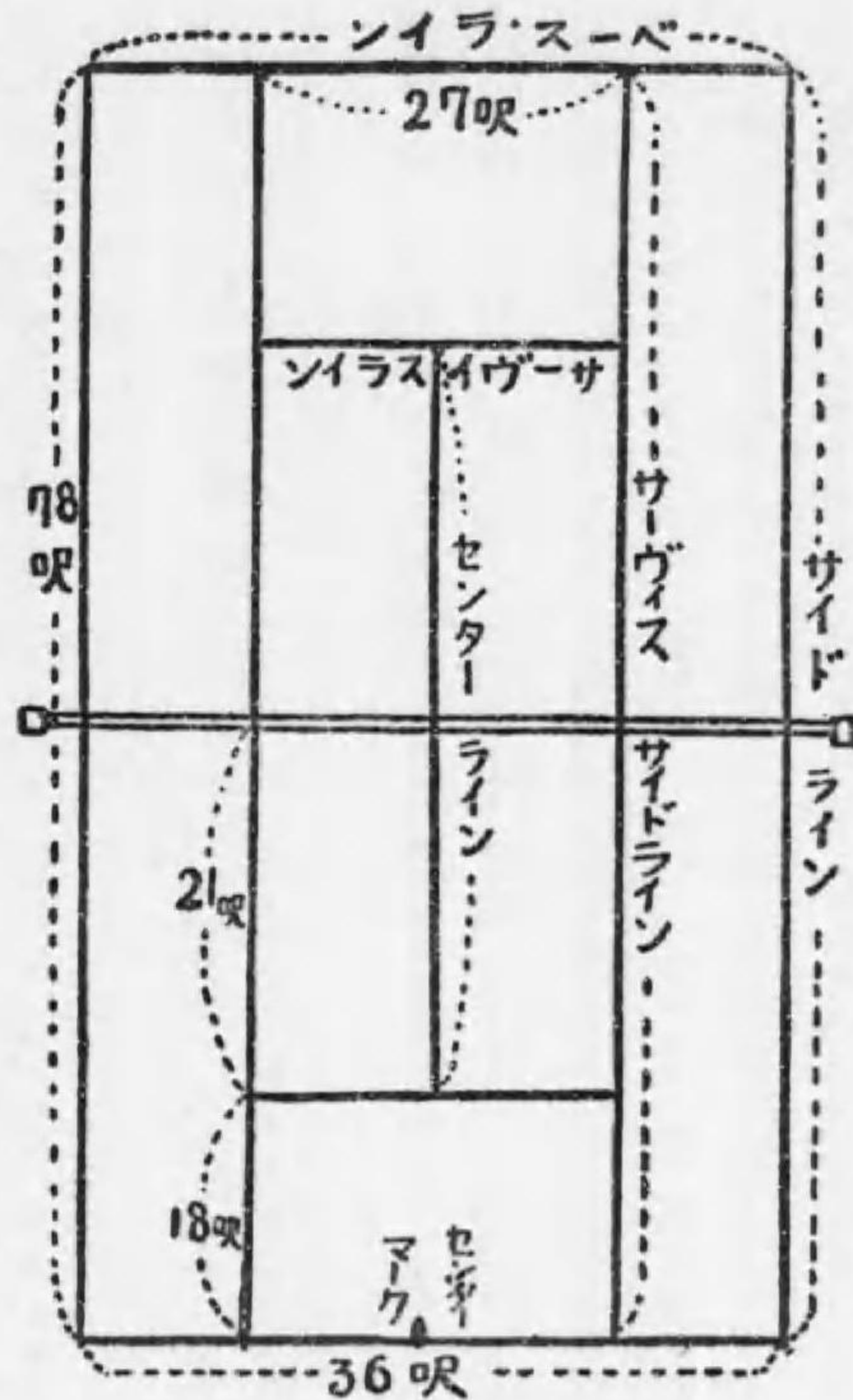
二オンス十六分の一。而

して氣溫華氏六十八度内

外の時に於て、百吋の高

所よりコンクリートの床上に落すとき五十吋より六十吋までのバウンドあるを要す。

第四條 プレーヤーはネットを隔て、對峙す。最初にボールを打つ方をサーヴァー、他をレシーヴァーといふ。



硬球のコート……圖十二第

第五條 第一回のゲームに於けるサイドの選擇とサーヴァー又はレシーヴァーとなるかはトッスによりて定む。

トッスに勝てる者コートを選択するときは、その相手はサーヴァーかレシーヴァーかの何れかを選ぶ。トッスに勝てる者サーヴァーかレシーヴァーかの何れかを選びたるときは、相手方はサイドを選択す。トッスに勝てる者が、その相手に最初の選擇權を與ふるは自由とす。

第六條 サーヴィスを始めるに當り、サーヴァーはベース・ラインの後方に、センター・マークの想像延長線とサイド・ラインとの間に兩足にて立つ。斯かる位置を取りし時よりラケットにて球を打つまで、兩足は必ずベース・ラインの後方に置くべく、しかも少なくとも一方の足は、地上に固着しあるを要す。

第七條 サーヴィスは次の方法にて行ふ。サーヴァーはボールを手にて空中に投上げ、それをラケットにて打つ。但し一方の腕を使用する者はボールを投上げるために、ラケットを利用することを得。ボールとラケットとの接觸のときを以て、サーヴィスが完了したるものと見做す。

第八條 サーヴィスは毎回最初右側より始め、以後は左右交互に行ふものとす。而してサーヴしたるボールはレシーヴァーがそれを打返す前に、ネットを越えて對角線上のサーヴィス・コートの中か又はこのサーヴィス・コートを圍む線上に落つるを要す。

第九條 次の場合のサーヴィスはフォールトとす。(一) サーヴァーが規則第六・七及び八條の範圍外のことを爲したる場合。(二) サーヴァーがサーヴしたるときに球を打ち損じたる場合。(三) サーヴしたる球が地面に

當る前に、常備物(ネット・ストラップ・又はバンド以外の)に觸れたる場合。

第十條 サーヴァーは最初のフォールトの後、そのフォールトをなしたると同一のコートより更に今ま一度サーブするを得。但しサーブすべきコートを誤りて正しからざるコートよりサーブしたるためのフォールトは、次のサーブはコートを変更して行ふ。第二のサーブの完了後はフォールトを主張することを得ず。

第十一條 サーヴァーはレシーヴァーの用意整はざるうちは、サーブすることを得ず。若しレシーヴァーがサーブを打返さんと試みたるときは、已に用意したるものと看做す。若しレシーヴァーが用意の整はざるを示したる後は、サーブせる球が正規の境界内に落ちざりし理由を以てフォールトを要請することを得ず。

第十二條 次の場合のサーブはレットとなる。(一) サーブせる球がネット、ストラップ又はバンドに觸れたる場合。但し球が相手の正當のコート内に落ちしときに限る。(二) 規則第十一條に規定するレシーヴァーの用意整はざるになされたるサーブ又はフォールト。レットの場合にはサーブは勘定に入らず、サーブは再びサーブを繰返す。但しレットは先になしたるフォールトを取消すことなし。

第十三條 第一回のゲーム終りしときは、サーヴァーはレシーヴァーに、レシーヴァーはサーヴァーにかはり、かくて試合の終了まで毎ゲーム交互に交代す。

第十四條 フォールト又はレットにあらざるサーブがなされしときより、一その得點の決定するまでをプレー中にあるものと稱す。

第十五條 次の場合はサーヴァーの得點となる。

- (一) サーブしたる球が、地面に當る前にレシーヴァーの身體、衣服その他の所持品に觸れたる場合。
- (二) 規則第十七條の定むるところに従ひ、レシーヴァー失點するとき。

第十六條 次の場合はレシーヴァーの得點となる。(一) サーヴァーが二回フォールトを重ねたるとき。(二) 規則第十七條の定むるところに従ひ、サーヴァー失點するとき。

第十七條 プレーヤーは次の場合に失點となる。(一) ボールが連続的に二回地面に觸れざる以前にネットを越して打返し得ざりしとき(但し規則第二十條の例外あり)。(二) 相手方のコートを劃する線外にプレー中のボールを打返したる時。(三) コートの外側にあるとき球をヴォレーし正當に打返さざりしとき。(四) 一度以上プレー中のボールを打ちたるか又は之に觸れたるとき。(五) ボールを打つとき及びボールがプレー中にあるとき身體、ラケットその他衣服、所持品が、ネット、ポスト、コード、ストラップ、バンド又は相手方のコート面に觸れたるとき。(六) ボールがネットを越えざるうちにヴォレーしたるとき。(七) プレー中の球が身體又はラケット以外の衣服や所持品に觸れたるとき。

第十八條 ライン上に落下したる球はそのラインによつて劃せられたるコート内に落ちたるものと見做す。

第十九條 プレー中のボール一度地に落ちてより、常備物(但しネット、ポスト、コード、ストラップ及びバンドを除く)に觸れたるときは、そのボールを打ちたるもの勝ち、地に落ちざる先に常備物に觸れたると

きは、その相手方が勝つ。

第二十條 次の場合に於ける打球は良好と認めらる。(一) 球がネット、ポスト、ストラップ、コード又はバンドに當りたるも、コート内に落ちたるとき。(二) サーヴのボール又は打返したるボールが一旦正當のコート内に落ち、遂にバウンドするか風に吹返されるかしたるため再びネットを越えたるとき、そのボールを打返す番のプレーヤーがネットより身を乗出して競技したる場合。但しそのプレーヤーの身體、衣服、ラケットがネット、ポスト、ストラップ、バンド、コード若しくは相手方のコートに觸れず、かつ打球が他の點に於ても正當なるを要す。(三) 球がポストの外側を通るも、またポストに觸れたりとしても、正當のコート上に落ちたる場合。(四) プレーヤーのラケットが球を打返したる後にネットを飛越え行きても、若し球がそれより以前にネットを越えて正當に打返されてある場合。(五) プレーヤーがサーヴのボール又はプレー中のボールを打返したる後、そのボールがコート中にありし他のボールに當りたるとき。

第二十一條 プレーヤーはコート内の常備物にあらざる自己の注意以外のもの、ために打球を妨げられし場合は打球を遣り直すこと。

第二十二條 第一ポイントに勝ちし方を15とスコアし、第二ポイントにも勝ちしときは30、第三ポイントにも勝ちし方を40、而して第四ポイントにも勝ちし方を一ゲームの勝と記録す。若し兩競技者が同じく三ポイント宛勝ちしときは之をゲームと稱し、次のポイントを得た方をアドヴァンテージと記號し、引續き

その次のポイントを得たるときにゲームに勝つこととなる。然し若し一方のプレーヤーが同じく次のポイントを得たるときは再びゲームと呼稱せられ、ゲームの後には繼續して二ポイントを勝つ迄續けるものとす。

第二十三條 六ゲームを先取せし方は一セットを勝てりと稱す。但し双方とも五ゲーム宛勝ちしときはスコアはゲーム・オールとなり、次の二ゲームを引續き勝ちし方が、そのセットを得ることとなる。このとき若し相手方勝てば、スコアは再びゲーム・オールとなり、斯くて同一のプレーヤーが續けて二ゲームを勝つまでプレーを續けるものとす。

第二十四條 プレーヤーは各セット中一、三、五などの奇數ゲームの終了毎にサイドを変更す。但し一セットの終りに當り、ゲームの總數が偶數なるときは、次のセットの第一ゲームの終りまでコートを變更せず。

第二十五條 一競技に於けるセット數は最多五セットとす。但し女子の場合は三セットとす。

第二十六條 例外の明示なき限り、本規則の男子に關するものは、之を女子にも適用す。

第二十七條 審判者の任命せられたる試合に於ては、審判者の決定は最後のものなり。然れども若しレフェリー任命せられたるときは、審判者の審判に不服ある場合に之をレフェリーに訴ふることを得。かゝるときはレフェリーの審判を以て最後の決定とす。レフェリーは自己の考へにより日没のための暗黒、グラウンドの状態、天候等に鑑み、何時にても試合を延期することを得。試合延期の場合は延期前のスコア及びコート位置はそのまま有効にしてレフェリー及びプレーヤーの一致の賛成なき限り無効にすること能はず。

第二十八條 競技は第一サーブミスより試合の終了まで續行す。但し第三セットの終り、女子あるときは第二セットの終りに於て、プレーヤーは十分間を越えざる休息をなすことを得。またプレーヤーの不可抗力による事情のため必要あるときは、審判者は必要と思惟する間だけ競技を中止することを得。本規則は嚴守するを要しプレーヤーの精力を恢復する目的を以て競技を中止するを得ず。審判者は故意に競技を遅らせたるや否やの審判に關しては全權を有し、違背者に適當の警告を與へたる後之を失格せしむることを得。

第二十九條 以上の規定は次の場合と共にダブル試合にも適用せらる。

第三十條 複試合のコートは幅三十六呎、即ち單試合のコートの幅よりも兩側共四呎半長し。單試合のサイド・ラインのうち二つのサーブミス・ラインに限らるゝ部分をサーブミス・サイド・ラインといふ。

第三十一條 各セットの最初のゲームは、サーブする權利を有する組は任意に二人の中一人をサーブするものと定め、その相手方の組も同様第二ゲームに於てサーブすべきものを任意に定むることを得。最初のゲームにサーブしたるプレーヤーのパートナーは第三ゲームにサーブし、第二回のゲームにサーブしたるプレーヤーのパートナーは第四回目のゲームにサーブし、かくてこの順序にて一セットの終りまで繰返す。サーブの順序は、そのセットの終りまで變更するを得ず。新らしきセットに入るとき變更するを得。

第三十二條 規則第九條に該當するか、球がサーブのパートナーの身體、衣服、所持品に觸れたるときサーブはフォールトとなる。若しサーブしたる球が地に落ちざる先に、レシーヴァーのパートナーの身體

衣服その他に觸れたるときは、サーヴァー得點す。

第三十三條 順番にあらざるプレーヤーがサーブしたるときは、誤りの發見次第サーブすべかりしプレーヤーがサーブす。然れども一旦スコアされたる得點及び發見以前のサーブミスはフォールトはカウントさる。若しゲームの完了後まで誤りが發見せられざるときは、誤りたる順位を以てゲームを繼續す。

第三十四條 レシーヴァーはゲーム毎に交代す。この順位は各セットの終りまで變更することを得ず。

第三十五條 球は各組交互に打つ。この規則に反しプレー中の球がラケットに觸るゝときは相手の組得點す。

庭球用語

【ア・イ・ウ・エ・オ・カ・キ】

アウト(Out) 打合中の球がコート外に打出されたのをいふ
アンパイヤー(Umpire) 競技の審判に當る人
アウト・プレイヤー(Out player) 相手の競技者
アングル(Angle) コートの隅のこと
ウィンナー(Winner) 勝利者
ウィーク・ポイント(Weak point) 弱所
ヴォレー(Volley)

ラケットの握り方
グラウンド・ストローク (Ground-stroke) 球がバウンドしてから打つ打ち方
グラス・コート(Grass court) 芝生コート
ゲーム(Game) 勝負
ゲーム・セット(Game set) 勝負の終
コントロール(Control) 球を統御すること
コート・ルール(Court rule) コートの障害物等に就き特に定められた規則
コーナー(Corner) コートの隅

直接球の總稱

エース(Ace) キメル、狙ふ
クリーン・エース(Clean ace) 見事なキメル
エ・バイ(A bye) 不戦一勝
エラー(Error) 過失
オーダー(Order) 試合に於ける出陣の順序
オッズ(Odds) ハンデキャップに同じ
オーバー・ヘッド(Over-head) 頭から上の(ヴォレー・スマッシュ)
オーバーワーク(Over-work) 過勞
カット(Cut)

コース(Course) 方向
コンディション(Condition) 状態または工合、その日のコンディション、身體のコンディションなどいふ
コーチャー(Coacher) 指導者
サイド(Side) 側(コートやプレイヤーの)
ショット(Shot) 狙ひ打ち
グッド・ショット(Good shot) 見事な狙ひ打ち
シートッド(Stated) シーテッド(Stated) 適當に組合せて初めから強い人同志がぶつからないやうにすること、シートッドされた選手を

球を切ること。チョップと同意味

カヴァー(Cover) 掩護すること
カーヴ(Curve) 曲ること
カウント(Count) 點やゲームの計算のこと
ガット(Gut) ラケットに張つた弦
キャノン・ボール(Cannon ball) 砲彈の如き受け返し得ぬ球
【ク・ケ・コ・カ・サ・シ・ス・セ】
クロス(Cross) 斜め、クロスにヴォレーするなどいふ
クロス・ゲーム(Cross game) 接戦
グリップ(Grip)

シートッド・プレイヤーといふ
ジュニヤー(Junior) 少年選手
ストローク(Stroke) 球を打つ方法の總稱
ストラップ(Strap) ネットの中央でその高さを三呎に保たしめるために吊下げられてあるキャンバス製の帯をいふ
スマッシュ(Smash) 打ち込み
スマッシング(Smashing) 打ち込む動作(通常はスマッシュのことを言つてゐます)
スコア(Score) 得點の記録
ストップ・ヴォレイ(Stop volley) 直接球をネット際に小さく落す

打法

ストライカー・アウト (Striker out)
 レシーヴァーと同意味
 ストレート (Straight)
 真直な
 スウィング (Swing)
 ラケットを振ること
 スタート (Start)
 出足
 スピン (Spin)
 回轉
 トップ・スピン (Top spin)
 上方回轉
 バック・スピン (Back Spin)
 後方回轉
 セット (Set)
 一回の勝負を一セットといふ。早く六ゲームを得た方が一セット

の勝者となる

【ソ・タ・チ・ツ・テ・ト・ナ】
 ソフト (Soft)
 軟球のことを略していふ
 ダッシュ (Dush)
 ネット際へ勢付けて前進すること
 チャンピオン・シップ (Champion-ship)
 選手權
 チョップ (Chop)
 球を切つて打つこと
 チーム・ワーク (Team work)
 組の連絡
 チャレンジ (challenge)
 挑戦すること
 ヌロー (Draw)
 組合せ

デフォルト (Default)

棄權
 デビス・カップ (Davis cup)
 國際庭球戦の優勝チームが獲得するカップで、米國海軍卿デビス氏が寄贈したカップです。その試合を普通デビス・カップ戦といひ、世界最高級の庭球戦です。
 トーナメント (Tournament)
 正式競技會のこと
 トゥス (Toss)
 試合開始に當りサーヴィス及びコートの選擇を決定するためにラケットを地上に廻しその表裏に従ふこと。即ちトスに勝つたプレーヤーは自由にコートまたはサーヴィスを選択することができる。ラケットの表をスムーズ

裏をラフと呼ぶ

トロフィー (Trophy)
 優勝盃
 トレーニング (Training)
 練習
 トキスト (Twist)
 球の廻轉をいふ
 トップ (Top)
 上面
 ドローン・ゲーム (Drawn game)
 無勝負
 ドロップ (Drop)
 落下
 ドライヴ (Drive)
 球に右廻轉を與へる打ち方
 ナット・アップ (Not up)
 相手の打つた球を打返さうとして一度目のバウンドに間に合は

ぬときいふ言葉です。同意味の
 ツー・レントは國際的用語では
 ありません

ナッシング (Nothing)
 零のこと。ゲーム・カウントの
 ときにいふ
 【ネ・ノ・ハ・フ・ヘ・ホ】
 ネット・プレー (Net play)
 ネット際で行はれるプレー
 ネットプレーヤー (Net-player)
 よくネット際に出てテニスをする
 プレーヤーのこと
 ノウ (No)
 アウトの場合にいふ
 ノウ・カウント (No Count)
 計算に入れないこと
 ハーフ・ヴォレー (Half volley)
 球がバウンドするや否や打つ打

法、ショート・バウンドともいふ

ハンドル (Handle)
 ラケットの柄
 ハンディキャップ (Handicap)
 戦はずして何點かを與ふること
 バウンド (Bound)
 反撥
 バウンド・レス (Bound-less)
 球が反撥せぬこと
 バックハンド・ストローク (Back hand stroke)
 左側で打球すること (通常單に
 バックともいふ)
 バックハンド・ヴォレー (Backhand volley)
 左側で打つ直接球の總稱
 バックハンド・ドロップ (Back-hand lob)

左側で打つ高球の總稱
パートナー(Partner)

組の者

ビギンナー(Beginner)

初心者

フォアハンド・ストローク (Fore-hand Stroke)

右側で打つことの總稱、單にフォアともいふ

フォアハンド・ヴォレー (Fore-hand volley)

右側で打つ直接球の總稱

フォアハンド・ロップ (Fore-hand lob)

右側で打つ高球の總稱

フォロー・スルー (Follow through)

重心の移動のこと

フォーム(Form)

球を打つ姿勢

フレーム(Frame)

ラケットの枠のこと

フォールト(Fault)

サーヴした球が規定の區劃内に
入らざる場合

フット・フォールト(Foot fault)

規則により足のためにフォール
トになりし場合

フット・ワーク (Foot Work)

足の動かし方

フォールト・アゲン (Fault again)

ダブル・フォールトと同じ

ファスト・サーブ (First Service)

第一のサーブ

プレースメント (Placement)

狙ふこと、普通プレーシングと
もいふ

プレーヤー (Player)

競技者

プレス(Press)

ラケットの枠に狂ひを生ぜぬや
うに保存しておく器具

ブレイク(Break)

曲つてバウンドすること

ペース(Pace)

球勢

ヴェテランス (Veterance)

老年のプレーヤー

ポイント(Point)

點のこと、四つのポイントを得た
獲得したものを一ゲームを得た
と稱す

ポスト(Post)

ネットを支持する棒

ポール(Pole)

ダブルコートを使つてシング
ルをやる場合、ネットの兩側に立
てる棒

ボディ・オーバー (Body over)

球を打たんとして身體の一部分

がネットを越し、または觸れた
るときにいふ

【マ・ニ・ム・モ・リ・リ・レ・ロ】

マッチ(Match)

試合

マッチ・プレー (Match-play)

試合向きのプレー、従つて試合
に出る選手をマッチ・プレーヤーと
いふ

ミックス・ダブル (Mixed Double)

敵味方とも男と女と組んでダ
ブル・ゲームをなすこと

モーション(Motion)

球を打つときの動作

ライン(Line)

コートの區劃線

ライン・キーパー (Line keeper)

線審判人

ライト(Right)

ボールが正しいときにいふ

ライト・コート (Right-court)

右コート

ラリー(Rally)

打ち合ひ

ラブ(Love)

零點

ラブ・ゲーム (Love game)

零敗のゲームのこと

ラケット・カヴァー (Racket cover)

ラケットを入れる袋

ラケット・ケース (Racket case)

ラケットを入れるカバン

ラウンド(Round)

回戦のこと、ファイナル・ラウン
ドは決勝戦、セミ・ファイナルは
準決勝戦

レターン(Return)

球を返すこと

レフェリー(Referee)

トウナメントを支配する位置に

ある人、即ち委員のこと

レシーヴ (Receive)

サーヴを受け返すこと

レシーヴィング (Receiving)

レシーヴする動作

レシーヴァー (Receiver)

レシーヴをする人

レギュレーション・ボール (Regulation Ball)

硬球のこと

レット(Let)

サーヴした球がネットに接觸し
ながら正當のコートに入ったの
をいふ。このときはその都度や
り直す

レフト・コート (Left court)

左コート

ロップ(Lob)

高球、またロッピングともいふ

ローラー(Roller)

地均し器械

——をばり——

主婦之友社編輯局編

主婦之友家庭叢書

〔篇八第〕 〔篇九第〕 〔篇十第〕 〔篇十一第〕 〔篇二十第〕

投入と盛花の生け方

最近再
生花が
盛んな
庭やつ
て出入
の来ま
と新ぬ
きいど
本生花
は深就
唯一の
の好手
引でそ
すしす
い

水泳の上達法

直夏
の日は
中、海
川に水
泳する
の楽
運行動
はそれ
は、男
子に水
泳する
の楽
やしに
注意を
明し水
泳した
もの切
で秘上
す。訣
達問の
楽

全国温泉旅行案内

著名な
温泉も
、さて
行つて
みれ
ば、實
に案外
のとこ
ろがあ
ります
。本
書は、
旅行の
案内を
おのし
たもの
に、立
ちます
。本
書は、
旅行の
案内を
おのし
たもの
に、立
ちます
。本

子供洋服の作り方 (夏服)

女の子
の手を
、美し
く涼し
さうに
洋見
せ
るに、
縫製し
て、手
で、洋
型を
取、安
い方に
、着ら
れ、手
で、洋
型を

子供洋服の作り方 (夏服)

洗濯が
自由で
、経済
で、涼
しい
男の子
の洋服
を作る
方法が
、この
本に載
せてあ
ります
。本
書は、
子供服
の作り
方を、
男の子
の洋服
を作る
方法が
、この
本に載
せてあ
ります
。本

定価各冊金拾六銭・郵税各冊金四銭

(御入用の方は主婦之友社または各地の書店にお申込みください)

主婦之友社編輯局編

主婦之友家庭叢書

〔篇三第〕 〔篇四第〕 〔篇五第〕 〔篇六第〕 〔篇七第〕

ニキビとソバカスの療法

ニキビ
やソバ
カス
を、手
軽に治
す
方法
を、詳
しく説
いてあ
る。本
書は、
皮膚科
の専門
医が、
この病
の療法
を、切
實に説
いてあ
ります
。本

草花の上手な作り方

草花の
作りか
た、ど
んなに
上手に
作るか
、その
秘訣を
、この
本に載
せてあ
ります
。本
書は、
草花の
作りか
た、ど
んなに
上手に
作るか
、その
秘訣を
、この
本に載
せてあ
ります
。本

テニスの上達法

テニス
の心得
、この
本に載
せてあ
ります
。本
書は、
テニス
の心得
、この
本に載
せてあ
ります
。本

家庭で実行される利殖法

利殖法
、この
本に載
せてあ
ります
。本
書は、
家庭で
実行さ
れる利
殖法を
、この
本に載
せてあ
ります
。本

良人操縦の秘訣百ヶ條

良人の
操縦の
秘訣を
、この
本に載
せてあ
ります
。本
書は、
良人の
操縦の
秘訣を
、この
本に載
せてあ
ります
。本

定価各冊金拾六銭・郵税各冊金四銭

(御入用の方は主婦之友社または各地の書店にお申込みください)

面白く安く有益な

主婦之友

◆五だけの力で五つの雑誌を出す雑誌社があります。また五だけの力で一つの雑誌しか出さない雑誌社があります。讀者の眞に求むるものは後者であることは申すまでもありません。そして『主婦之友』もその後者の一つであるのはいふまでもありません。

◆『主婦之友』は東洋第一の雑誌として許されてをります。それは單に發行部數に於てのみならず、堅實にして常に清新なる内容に於ても、またその編輯に惜みなく、資力と勞力の限りを盡す點に於ても、絶對に他の追隨を許さぬものがあります。

◆試みに『主婦之友』の運動記事について御覽ください。新しき運動競技の傾向は勿論、その方法についても、常に紹介の魅をなすものは『主婦之友』であります。これを擔當する記者の如きも、すべて一流の運動家を以て當て、記事の正確を期してをります。

◆もし未だ『主婦之友』を御覽にならない方があつたならば、最近號を一度だけなりと御覽ください。實生活の上に齎す大きい力は、必ずや二回三回と、繼續を餘儀なくするものがあらうと信じます。一冊定價五拾錢、半年分參圓廿錢、一年分六圓貳拾錢、外國行一年分八圓であります。

東京・神田・駿河臺 主婦之友社 振替東京一〇八番

終